

山崎合戦の吉秀(上)

其一

●秀吉は、山崎の一戦に、天下を得たり。假令、天下未だ悉く彼の號令を奉ずるに至らずとも、運命の神は、既に彼の頭上に宿れり。

●彼が一代の決戦の中、其の尤も俊敏、颯爽として、彼の雄姿を表現せるものは、山崎の一戦たらずんばあらず。彼は、賤ヶ岳に於けるも、小牧に於けるも、つねに其の雄風は變はらず。然れども彼に取りて、生涯第一の大決戦は、山崎に在り。山崎合戦は、彼が運命の轉換機なりしなり。

●秀吉の生涯は大博奕の如くなりしと古人も言へり。而して彼が生涯の大戦に、眞に、生死を賭して、大博奕を試みしは山崎合戦なり。賤ヶ岳にても、小牧にても、實は、彼の心中必勝を期し、成算歴々たり。其の跡、ただ危ふきが如くして、彼には死地に非ず。山崎合戦ばかりは、彼、全く、生死を必とせざりし。

●秀吉が一生の智勇、膽識、すべて一時に凝集し、煥發するものは、山崎の一戦ならずんばあ

らず。之を以て、山崎の合戦の事實は、秀吉研究に於て、殊に、感興の旺盛なるものあるを覺ゆ。

●秀吉の人格、精神を尤も能く表現するもの山崎合戦に在り。此の大英雄が成功の面影は、遺憾無く、山崎合戦の上に現はれたるを見よ。

●山崎合戦を見れば、實に、秀吉のみならず、萬人成功の大道、全く此の如し。秀吉は、古今の大英雄にして、其の事業も亦た古今の大成功なり。而して此の大英雄の大成功の秘訣を語るものは、山崎合戦に非ずや。

其二

●山崎の決戦は、秀吉、明智光秀を撃つて、亡君織田信長の爲に復讐するなり。戦は氣なり。戦ふは名無かる可らず。山崎の一戦、大義名分堂々として、戦氣、既に一世を壓す。秀吉の出世戦なり。

●山崎合戦の次第を語るべし。秀吉、高松城を下し、毛利氏と講和し、疾驅して歸京の途に上る。此の時、秀吉、毛利氏に告ぐるに、本能寺の變を以てすといふは誤なり。

●山陽の日本外史に、秀吉、毛利氏の使者を引見し、信長父子の遺難を語り聞かせ、それにても尚ほ講和するやと問ふ。使者復命す。毛利氏、果して和戦の説紛々たり。小早川隆景、大義

を執り、先約を守つて講和し、且つ援兵を秀吉に送ると記せしより、秀吉の紳々たる態度、久しく世人の隨喜を値せり。

●外史の記事、眞書太閤記に據れるなるべし。此の如き英雄崇拜の記事、尤も人耳に入り易し。然れども實説に非ず。

●ひるきの引き倒しといふ事あり。如何に、秀吉の雄姿を以てすとも、當時、實力未だ副はず、好んで腹背に強敵を受けるの愚を爲す可きに非ず。彼が、信長の死を秘し、信長の名の下に、毛利氏と講和したるは眞事實とす。此の如くありしとて、寸毫も、秀吉の英雄的價値を割引するの恐ある事無し。

●先年、史學雜誌の紙上に於て、子三浦梧樓は、如上の問題に就き、一歴史家と爭論せし事あり。蓋し高杉晉作の外、殆んど崇敬せざる觀樹と雖、秀吉を崇拜するに至つては人後に落ちず。其の講利問題の如きも、先入、主となり、全く外史の説に盲從せるを見る可し。

●秀吉は崇拜せらる、の餘、却つて其の人物、事實、誤傳せらる、事少からず。彼を大ならしめんとして、却つて之を小ならしむるものも少しとせず。

其 三

●秀吉、毛利氏と講和して、歸東の途に就くは六月五日なり。疾驅三日にして、八日午前十時頃、姫路城に入れば、洗湯、既に沸きて彼の歸るを待てり。彼、入浴するに臨み、堀秀政に謂ふ。足下、兼行の勞、想ふべし。然れども母、吾を待つこと急なり。足下は、後刻、ゆるくと入浴せよ。彼、此の突嗟の際にも、群雄の心を攪るを忘れず。

●堀秀政は久太郎と稱す。秀吉の戦友にして、かねて彼と相許す者なるらし。早く秀政の才幹を認めたる者は、秀吉なり。先きに備中に急行して、本能寺の變を報する者なり。故に、秀吉、彼を遇すること厚し。

●秀吉、高松を發して東上するや、途中より返書の中川清秀に送り、詐つて信長父子の健在を報じ、岡山を過ぎ、宇喜多の老臣を見て、託するに毛利氏の追撃に備ふ可きを以てし、其の夜は沼城に一泊し、翌六日、福岡の渡頭に到り、出水に會し、將士を戒め、一卒一物を失ふこと無くして、慎んで渡らしめ、今、一卒一物を失はば、他日、百人百荷を失ひたりと笑はれんと言ふ。彼の沈著、冷靜なるを見るべし。

●秀吉、既に福岡を渡り、毛利氏の歸西を聞き、始めて使を遣はして、本能寺の變を告げしむ。是より前、毛利氏にも智謀の士少からず。定めて東軍の情實をも偵察するを怠らざりしなる可きも、秀吉の細心なると敏捷なるとは、敵をして能く其の虚隙を發見するを得ざらしめたるな

●敵方より見るも、秀吉の態度、如何にも沈著にして、到底、其の首領を喪ひし人とは想像されざりしなるべし。乃ち彼が歸東途上より、本能寺の變を報ぜしめし時、毛利氏の帷幄に、彼に致されたるを感慨せし者も有る可く、又た竊に彼の智勇に敬嘆して、其の將來に囑望せし者もあるべし。

●彼は、福岡より西片上に出で、船に乗つて赤穂に上陸し、それより陸行して姫路城に入れり。

其 四

●黒田如水、秀吉に獻策するに、途中、姫路に淹泊する事無く、急行して、一氣呵成に、光秀の不意を衝く可きを以てす。秀吉、心中又た早く既に、疾風迅雷の勢を以て東上するの秘計あり。

●秀吉、姫路城に歸り、先づ一浴するや、直ちに小姓を浴室に召して、出軍令を傳ふ。曰く、明旦、姫路を出發して、東向す。一貝、鳴れば食を調へ、二貝、軍屬を出せ、三貝、因南野に諸隊を檢閲せよ。彼が乾坤一擲の大博奕の號令は、此の如く、浴室の中にて傳へられき。

●秀吉、又た金奉行を召して問ふ。天主閣に貯ふる金銀幾千ぞ。金奉行答ふ、銀七百五十貫、

金八百枚餘。是れ當年、山崎合戦前に於ける秀吉の實力なり。

●秀吉、金奉行に命じて、其の金銀を以て悉く蜂須賀正勝に送り、將士の俸祿に應じ按分配當せしむ。而して藏奉行を召して問ふ、倉廩の米穀、幾千ぞ。答ふ、八萬五千石。秀吉乃ち命じて倉廩を開かしめ、向後二十日の間、卒伍の扶持を五倍せしめむ。彼の態度、此の如く、悉く金穀を散じて、大勝負を試むるの精神、躍如たるに非ずや。

其 五

●秀吉、浴中に、出軍令を下し、悉く金穀を處分し、浴畢つて、坐に著き、徐ろに茶を啜つて、諸將と閑談す。大勝負の前、悠々たる彼の態度かな。

●堀秀政、座に在り。秀吉曰く、まさに一大博奕を、貴覽に供せんとするなり。秀政曰く、風は順風なり。十分、帆を揚げ玉へ。

●席上の諸人、皆、能く秀吉の心事を解し、又た能く其の神器と大勝とを信じて疑はず。侍臣幽古、一言を進めていふ、天下の形勢、譬へば櫻花の爛漫たるに似たり。

●黒田如水、亦た櫻花を説いていふ、吉野の櫻花、今、満開なり。假令、櫻花を觀んとするも、開花の時來らざれば能はず、今、實に、大公觀櫻の始ならずんばあらずと。

●諸將、秀吉の心中を忖度し、争うて嘉言を進む。秀吉、頗る快心の微笑を漏らす。ひとり祈禱僧あり、明旦の進發を諫止し、一たび去つて復た歸らざるの悪日なりといふ。秀吉、且つ戯れて曰く、果して然らば明日は極めて吉日なり。吾若し敗れなば、安んぞ再歸するを得ん。若し光秀を破らば、まさに形勝を擇んで居城を定むべし。又た何ぞ此の邊城に歸り來らん。明日は、吾が爲に、具に大吉日なり。祈禱僧曰く、此の如きは禍を轉じて福と爲すものなり。談畢る。秀吉、諸將を犒ひて、席を起ち、老母を省す。

●姫路進發の前一夜、秀吉心中極めて緊張したる中に、平靜あり、愉快あり、希望あり。秀吉の心は三軍の心なり。此の夜、滿城、勇んで靜に、肅として驕らず。破軍星も亦た彼の爲に光芒を増せしなるべし。

其六

●吾輩、秀吉を論じて、山崎決戦に至れば、吾が筆又た進んで已まず、自から筆の勞するを忘る、なり。蓋し、吾が國、英雄の傳記、秀吉の如く壯快なるは無く、而して山崎は、殊に、彼の颯爽たる面目を見る可ければなり。

●六月五日、秀吉、高松を發し、疾驅三日にして、八日朝、姫路の居城に歸り、戰備を整へ、

人馬を休養すること僅に一日に滿たず。其の夜、第一貝を吹き、これより三時間を過ぎ、九日の午前一時頃、第二貝を吹き、軍屬を結束、出發せしめ、第三貝を城外に鳴らし、進みて因南野に到り、軍隊を檢閲す。健行、二日を経て、十一日朝、秀吉の雄姿、山崎に現はる。則ち彼が本能寺の變報に接し、僅に、一週日に滿たざるに、早く既に百里を長驅して、大勝負の戰場に在り。

●秀吉、因南野に、軍を閱する時、まさに曉二時、星、平野に垂れて、球燈、地に布く。草木、また彼の威容を仰ぎ見るべし。

●第三貝を聞き、第一著に馳せ來る者あり。秀吉、祐筆に命じ、著到帳の筆頭に記せしむ。將士、相傳へて、先を争ひ來る。祐筆悉く記して一名を漏らさず。秀吉、著到帳を檢閲し、一冊ごとに署名し、終つて、之を祐筆に托して、什藏せしめ、他日、必らず點檢することある可しと云ふ。

●秀吉、既に著到帳を閱し畢り、床几を離れて諸軍を部署し、分つて五隊となし、まさに進發せんとして、留守將三好武藏、小出播磨の二人を召し、竊に命ずるところあり。當時、何事たるを知らず。後日に至り、其の事、秀吉、萬一敗戦の曉、城を焼いて一字一物をも遺すこと莫れと命じたる事、知らる。

●秀吉、既に、後事を處理し、軍容を整へ、因南野を發して東向す。時に、九日の早天三時頃なるべし。旗、指物、東天に靡き、進みつゝ、人馬、畫くが如し。

山崎合戦の秀吉(下)

其一

●秀吉、變を聞きて東上す、疾きこと風の如し。抑、光秀、事を舉るの時、勝家は北國に在りて上杉に對し、秀吉は毛利に對峙し、丹羽長秀も亦た四國征伐の途に上り、信長の宿將、悉く外に在り。鬼の留守の洗濯なりと思ひしに、秀吉歸東の報に接し、光秀、大に驚く。
●光秀は能く勝家、長秀の力量を知れり。彼の豫期の如く、此の二人者は、其の獨力を以ては、急歸、以て復讐戰を爲す能はざりき。ひとり彼が、戰勝後の整頓だも未だ成らざるに、秀吉の歸來するあらん事を期せざりし。故に、秀吉東歸の一報のみにても、光秀の膽を奪ふに足りしなり。

其二

●本能寺の變後、秀吉、山崎に現はる、に至るまで、光秀の行動を、秀吉と對照するの興味あるを覺ゆ。秀吉、毛利氏と講和し、高松を發するの日、光秀、恰も安土城に登り居然として信長の遺業を占め、財寶を點檢し、暫らく榮華の一炊夢に酔ひつゝ、主を失へる秀吉、勝家等が敵前の窮忙を憐察しつゝ、ありし。
●光秀は、安土を收めて、光春をして之を守らしめ、佐和山城を取り、筒井順慶を招きて洞ヶ峠に来る。順慶來らず。婿忠興、其の父藤孝も皆來らず。而して秀吉歸東すとの急報來る。
●光秀、事悉く豫期の外に出づ。秀吉の歸東は、案外の最大なるもの、家康の東走を伊賀路に要撃せんとして、之を逸したるも、亦た彼の悔恨、已む能はざりし一なり。此の夜、光秀、惆悵、歎息して、徹宵眠らず。
●光秀、夜明を待ち、淀城に到り、修築を設計し、工事を施さんとするに、忽ち秀吉、姫路を發して東上するの急報來る。
●急報に接し、光秀、工事を已め、直ちに軍議を開く。彼の部署は、山崎方面は、齋藤利三等を先鋒とし、兵二千。附するに阿部淡路守等三千の兵を以てし、天王山方面には松田太郎左衛門尉の鐵砲隊三百人を先鋒とし、並河掃部等丹波の兵二千を附し、山下の右方には伊勢與三郎等の二千、左方には津田與三郎の二千を以てし、光秀は自ら本隊五千を率ゐて後方に陣し、勝

龍寺の西方、御坊塚に本營を構ふ。
 ●光秀の軍議を察するに、進攻の氣勢乏しく、寧ろ防禦の氣分あり。彼が軍氣の、既に、秀吉に壓せらるゝを見るべし。光秀、軍議僅に定まり、軍を進むるの時、秀吉の戦書來る。明十三日、山崎決戦を通告し來る。光秀等心中、頗る驚く。

其三

●秀吉、礮路を發し、進軍して攝津の國境に來れば、中川清秀、高山右近等、各々質子を送り、一行を歡迎す。秀吉、質子を還す。二將、感激直ちに兵五千人を出し、秀吉の軍に加はる。沿道、風を望んで、秀吉に附く。
 ●秀吉、尼ヶ崎に入るや、禪房に投じ、信勝、秀政を召し、自から湯を浴び、髪を落し、二人は壯者なるを以て、落髪を已め、茶筌に結び、各々其の端を切らしめ、己の髪と共に集めて、紙片に包み、佛前に供す。寺僧に、戦勝後、寺領五千石の寄附を約し、金三枚を與へて布施す。

●秀吉、本能寺の變報に接して以來、軍中に在りと雖、亡君の爲に精進、潔齋を怠らず。而して尼ヶ崎に來るや、まさに戰場に近づかんとして、精進を廢し、魚鳥を料理せしむ。彼の説に、

壯者に非ず、疲勞を覺ゆ、一生の大決戦に不覺を取る可らずといへりしも、彼が、一面には、槍をも執らん、刀をも執らんと言へるを見れば、彼、眞に、未だ疲れず。神氣よく盛に、其の覺悟の切なるを見る。

●秀吉、直ちに急使を發して諸將を召集し、軍議を開く。筒井順慶、山岡美作よりも參加の報來る。高山右近は高松より、中川清秀は茨木より、池田信輝は有岡より、皆、尼ヶ崎に參集して、軍議に列す。これを尼ヶ崎會議といふ。

●尼ヶ崎會議の結果、秀吉、信長生前の部署法に本づき、先鋒高山右近、二陣中川清秀、三陣は則ち池田信輝と定む。秀吉は則ち中軍なり。

●此の夜、秀吉、富田に宿營し、翌十三日正午、織田信孝、丹羽長秀の大軍を率ゐて大阪より來會するを迎へ、右近、二千人。清秀二千五百人。信孝四千人、長秀三千人。而して秀吉の兵二萬、總軍三萬餘人。軍氣天地に振ふ。山崎の決戦、是より始まる。

●三七信孝は信長の遺子なり。信孝の來るや、秀吉、これを迎へ、共に手を執つて大に泣く。他日、秀吉が信孝に送るの書中に、其の時、筑前も吼え申候とあり。吼ゆといふは號哭するなり。當時の光景、想見するに餘あり。

其四

●山崎合戦、勝敗の決、天王山の奪取如何に在り。合戦は果して天王山より始まる。十三日の朝、光秀、陣を布き終り、天王山を望み、松田を召して、急馳して天王山に向はしむ。

●此の前夜、秀吉、中村一氏を召し、明早朝を以て、天王山を占領せしむ。中村曰く、天王山は争地なり。明日、争は必らず一著を輸せん。臣、既に、之を占領して、旌旗を隠くし射手を伏せたり。秀吉大に喜ぶ。

●天王山は果然、天下分ケ目の一戦たりき。秀吉、一著を先じ此の山を得て、合戦の大勢定まる。松田、天王山に急馳するや、中村、山腹より之を俯射して敵を驚かす。堀尾吉晴、中川清秀及び信輝、秀吉も亦た來り援ひ、堀秀政は松田を撃つて其の登山を阻止す。

●天王山一敗するの後、光秀の本隊も亦た順次、三面挾撃を被り、敗退す。光秀、狼狽して勝龍寺に退く。

●秀吉、輿に乗り、朱傘を差させ、諸陣を往來し、清秀を見て、瀨兵衛骨折といふ。其の態度既に天下を取つたる顔付なり。

其五

●秀吉、光秀を撃破する僅に半日のみ。半日にして、天下の大勢、全く秀吉に歸屬す。秀吉、信長に事へ、勝家、長秀の後塵を拜すること二十餘年。其の太だ長かりし間の偉大なる蘊蓄は、此の半日の間に發揮せられたるを見る。

●秀吉、光秀の勝龍寺に入るを遂うて、敵軍を撃破す。光秀、城中の兵を點檢するに一千に過ぎず、夜に入つて兵潰え、剩すところ僅に百人。光秀乃ち夜半、竊に脱出し、阪本城を指して奔り、伏見に至りて小栗栖を過る時、農夫の群に要撃せられて死す。

●秀吉、勝龍寺を圍み、敵の潰敗を見、敵を追蹙して、三十三間堂に陣し、堂上に陣する時、首級を検する者六七百。次いで農夫も亦た三箇の首級を獻す。其の中に光秀の首あり。秀吉、命じて之を粟田口に梟首せしめ、勝鬨を三唱せしむ。聲天地に震ふ。

●秀吉が群雄を威服するの態度、餘人の及ぶところに非ず。秀吉、光秀の首を得るの夜、淀に下り、姫路進發の際、従行せざりし者七人あるを知り、奉行に命じ、西下して、軍法に依り、自裁せしむ。奉行、遂に、七人の東上に逢ふ。乃ち之を自裁せしめ、其の首を獻す。秀吉、敵軍の首級と共に、之を棄てしむ。

●此の七人は、當初、病の爲に從行せざりし者なり。秀吉、また能く之を知る。然れども因南野に閱兵するの時、輿に乗り、人に扶けられても、幕下に馳せ参すれば可なり。病を稱して來らず。他意あるに非ずと雖、軍法は秒毫も假借せず。秀吉が早く大事を爲すを得るは、此の卓勵風發の精神に在り。卓勵風發は從行者より見れば時に嚴勵ならずんばあらず。

●天下を争はんとする者と雖、新附を愛撫して、敢て、或は後る、あらん事を恐る。秀吉は則ち此の一大事の際、軍法を嚴行して憚らず。其の膽力、古今に秀出するを見よ。

其六

●光秀、一舉して斃れ、剩すところは光春のみ。光春、安土城に留守す。然れども秀吉、光春が戦敗の報を得ば、必らず退いて阪本に入る可きを知る。秀政を召し、大津に急馳して之を要撃せしむ。秀政、到れば、果して秀吉の豫期に違はず。

●光春、明智左馬介を以て知らる。又た戦國勇士の典型なり。光春の兵、大津に潰敗するや、光春、乃ちひとり馬を躍らして湖水に投じ、遙に唐崎を指して渡る。英姿、眞に畫くが如く、秀政の軍、追撃を已め、皆、恍惚として目送するのみ。

●明智左馬介、湖水乗切は、戦國武勇談の、尤もローマンチックにして、又た尤も詩趣に富めるもの、一なり。光秀の部下に、此の如き見事の武士あるは、誠に意料の外に出づ。光春の武勇は、後世、世人の光秀に對する悪感を緩和すること少しとせざるべし。

●如何に光秀を悪める人と雖、明智左馬介湖水乗切の講談を聽く時、抵掌して快哉を稱せざるは有らず。海を背景にするは那須與市、而して湖水を背景とするは則ち明智左馬介、此の二人者の武勇の畫趣は、併せて雙美となす可きなり。

●吾輩、數年前、阪本に遊び、山上より唐崎を俯瞰し、光春騎渡の壯觀を冥想す。而して阪本は、吾輩の豫想せしよりも要衝にして、又た好風景なりし。

●却説、光春、湖水を騎渡して、唐崎に近かんとするを望見するや、秀政、急に五十騎をして、海道より彼を追撃せしむ。光春、唐崎に上陸し、馬を休め、奔つて阪本城に入る。

其七

●光秀が百姓の竹槍に斃れしは、天罰といふと雖、餘りに見苦るし。然れども光春の最期は堂々として、武士の面目を發揮せり。光秀にして、豫期の如く、阪本城に入るを得しとするも、其の態度、到底、光春に及ばざる可きは、山崎敗戦の際の狼狽に徴して知るべし。

●大敗戦の後を承け、綽々として後事を處理するは、大度胸と才識とを具備するに非ざれば能

はす。光春ほどの器量を抱いて、光秀の縁者たりしは、惜む可き事なり。若し彼をして秀吉の部下たらしめば、一廉の大名となる可かりし。

●光春徐ろに飯を喫して、城櫓に登り、秀政の大軍、全く城を包圍し了れるを見て、安土より、奪取せる刀劍珍寶を、城外に贈り、光秀の妻子及び己の妻を刺殺し、悠々として屠腹す。光春死し、明智氏全く亡ぶ。明智氏の榮華の夢、僅に十四日にして、醒めぬ。

其八

●抑、光秀、秀吉に及ばざるも尚ほ凡物に非ず。秀吉無かりせば、勝家、長秀等、到底、連に復讐戦を爲し得可もあらず。彼の悪運も、或は、案外、長く續きしやも知れず。

●秀吉の覇業の爲に、最大恩人の一は、光秀たらずんばあらず。光秀なくんば、秀吉、可憐、有爲の年輩を、如何に過す可かりしや、計り知る可らざるものありし。或は、大不幸にして、好機會を得難かりしやも知れず。

●吾輩、山崎合戦に於て、秀吉の爲に、尤も慶す可き所以のもの二つあるを思ふ。第一は、彼の年輩、閱歴經驗、既に十分に、天賦の天才を鍊磨し來つて、今や、成熟の最好時期に在り。彼が四十六歳にして、此の好機會に遭遇せるは、彼が天の寵命を得たる所以の、最も大なるものならずんばあらず。

●第二に、秀吉の爲に喜ぶ可かりしは、夏季なりし事なり。山崎合戦は、陰曆六月十三日、まさに陽曆の七月中旬に當る。一年、尤も日の長き時。此の季節なりし故に、彼は曉起、兼行し、或は風餐露宿、以て急行するを得たり。若し冬たらしめば、日短かく風寒く、假令、彼の精悍を以てすとも、かくばかり電奔するを得ざりしなるべし。

●秀吉の年輩と季節と、ともに尤も有爲なる可き好潮時に際して、絶好機會を以て、彼に投與す。而して彼の取らざるを欲すと雖、豈、得可けんや。

●天下を秀吉に授くる者は光秀なり。光秀こそ秀吉の爲に「露拂」の役に恰當せるものなりし。光秀と秀吉と、天下を授受するの際、光秀は悪名を冒し、秀吉は美名を得たり。此の二人者の人格、器量の相違にも依ると雖、天分、天恵の異なる、光秀の企及するを得るところに非ず。秀吉は飽くまで、天授の英雄たるを失はず。

●山崎決戦の事實は、幾多のローマンス、書趣、詩味を含み、併せて幾多の教訓を含めり。這般の教訓は道學的ならず。青年をして、明目張膽しつゝ、無限の興味に打たれしむべし。

三法師と秀吉

其一

●山崎決戦に大勝せる秀吉は、恰も關ヶ原に大捷せる家康の如し。然れども兩者が次の幕は、大に、脚色を異にするものあり。

●然れども此の二大戦が、其の形式の如何に係らず、一世の争覇戦たるを失はず。秀吉も、家康も、共に、各一此の一戦に由つて天下を得たり。

●信長薨後と、秀吉とは、形勢相似て、必ずしも同じからず。信長薨すとも信忠在りせば、織田氏の社稷、尙ほ一朝にして亡びず。然れども實權は漸く宿將に移らん。然れども信忠も死したるを以て、信長の薨後には、秀頼よりも小さかりし三法師を遣せるのみ。

●秀頼は幼少と雖、秀吉の遺業の繼承者たり。三法師も理に於て秀頼と同じ。但だ事實に於て、三法師は擁立者を待つて、始めて繼承者たるを得るなり。

其二

●信長の死は、中原の形勢を一變せしめたり。故に、光秀の叛報、四方に達するや、群雄の食指、大に動きしを疑はず。然れども光秀の熱焰、亦た一時、旺盛にして、彼に向つて、容易に突撃す可らず。且つ四圍の形勢に制せられ、中原に突出して、覇を争はんとする者、未だ出でず。

●萬難を排し、一氣に、中原に突出したる者は秀吉なり。此の際、秀吉の行動は、彼が群雄に秀出するを見る可し。彼は、既に、大勢を制するを得たりと雖、宿將、元老、上に在り、彼の地位、未だ低し。彼が覇者たらんには、尙ほ三法師を擁立するの一幕無かる可らず。

●三法師を擁立するは、大義名分を擁立するなり。秀吉の實望ありと雖も、聲望なほ勝家の上に出でず。勝家を壓倒するは、大義名分を以てする外無し。

●秀吉、光秀に勝つの後、當面の敵手は勝家なり。勝家にして、長秀の如く、秀吉に克つ可らざるを知つて、頭を下げば、秀吉は一躍して覇者となる可かりし。然れども秀吉は、戰はずして屈せる勝家を御するは易からず。

●勝家が秀吉に抗争したりしは、却つて秀吉の地盤を固くし、秀吉の覇業を早からしめたり。秀吉に、天下を捧ぐる者は、光秀の次には勝家なり。

其 三

●秀吉、山崎決戦に克ちて、姫路の居城に歸るや、大名、小名、賀を奉じて門前、市を爲すの盛況あり。秀吉は、既に天下の秀吉となりぬ。姫路の城は、彼には餘りに田舎過ぎたり。

●戦勝後の秀吉は、姫路に退き、暫らく靜平を保ちて、氣を養ひ、力を養ひ、以て、形勢を窺ふ。此の間、爲さざるが如くにして、大有爲の勢あり。此の無爲の空間こそ、彼と光秀との運庭にして、彼の智、光秀に百倍する所以ならずんばあらず。

●信長繼嗣の問題は當然、起る可くして、而して秀吉、決して自ら提議せず。徐ろに元老が此の問題に指を染め來るを待つ。光秀討伐に於て、疾風迅雷の如くなりし秀吉が、繼嗣問題に於て受動の態度を執れるは彼の智なり。

●彼が光秀に勝つの後、京都に留らず、暫らく姫路に還るは、一には、彼の野心無きを示すなり。彼は、風雲の動く遠からざるを洞察す。姫路に退くは、時の事のみ。

●天下の事、勢のみ。勢を制する者は克つ。彼が山崎決戦を急けるは、天下の勢を制せんが爲なり。彼、既に勢を制するの後、天下の優勢者なり。繼嗣問題、急ぐに及ばざるなり。今や彼は、立案者よりして、捺印者の地位に進めるなり。

●勝家は、既に、光秀討伐に於て、秀吉に、一著を輸す。然れども織田氏の婿にして、元老第一一人なり。繼嗣問題は須らく彼の口より提議されざる可からず。

其 四

●勝家の提議に由り、織田氏の大會議は岐阜に開かれ、越中の佐々成政の外、諸將悉く參集す。成政の來らざるは故意あるに非ず。勝家より命じて、越後の上杉氏に備へたるが故なり。

●若し光秀の惡運、半年を支ふるを得ば、織田氏の舊勢力は四分五裂せしならん。信長薨すと雖、尙ほ織田氏の社稷の結束を維持するを得るは、秀吉が一呼吸の間に、光秀を倒して、織田氏を恢復したるに由る。

●秀吉は、「吾、唯だ舊君の爲に報復したるのみ」といふ顔して姫路に退き、大會議は、元老勝家に依つて召集されしと雖、出席の諸將、油然として秀吉の功業と實力とを承認せざる能はず。

●元老宿將の爲す能はざりしところのものを、秀吉は一氣呵成に爲せしに非らずや。

●信長薨後、第一會の、此の大會に於て、諸將の心事、向背は卜知す可かりしなり。秀吉以上の元老宿將は、秀吉を抑へんとし、秀吉以下の諸將は、實力を認めて、秀吉を推戴せんとす。

●勝家、一益等の元老の勢力と、秀吉等の新進勢力の衝突は、此の大會議に表現せらる。勝家

は門閥あり、秀吉は成上りなり。然れども大勢は、新勢力の發達を謳歌しつゝあり。

●此の大會議に於て、新舊兩勢力の均衡を破りしものは、宿將の一人、丹羽長秀が、秀吉を援けし事、是なり。長秀は人物温厚にして、野心も少し。其の議論を見るに、頭腦明晰にして、條理を正せるのみならず、能く大勢の趨歸を知り、秀吉を援けたる也。

●長秀は、其の閱歷よりすれば、元老派の一頭目たる可く、彼にして若し柴田を助けば秀吉の爲には、由々敷問題なりしを疑はず。然れども長秀、由來、明識あり、且つ山崎合戦に参加して、秀吉の實力を知り、秀吉に對する同情もあり。秀吉に、天下を捧けたる者は、光秀、勝家の次、第三の恩人は長秀なり。

其 五

●此の大會議に、勝家より、信長の繼承者として、三七信孝を推選したり。其の理由は、此の大難の際、長君を立てるといふに在り。繼嗣の適法よりすれば、信孝は支流なり。宜しく信忠の遺孤を立てざる可らず。而して信孝、庸才、必ずしも彼を立てるを必要とするほどの人物に非ず。輿論も必ずしも信孝に傾かず、秀吉則ち三法師を主張し、長秀、之を援けて、議乃ち決したるなり。

●勝家にして、初より三法師を推選したりとせば如何。其にても秀吉、反對したる可き乎。秀吉は反對せざりしなるべし。而して機を見て、三法師の傳たらん事を願ひしやも知れず。

●席上、秀吉の主張、理の當然にして、大勢之に傾けりと雖、皆、勝家を憚り、敢て、一言を發する者無し。ひとり長秀、秀吉に贊成し、勝家を説得したるのみ。長秀に非れば、此の場合、發言し易からず、而して彼が元老の一人なるが故に、勝家も納得したるなり。

●長秀ありと雖も、秀吉、なほ席上に在れば、此の議論、決し難し。秀吉は満場の形勢、自家に有利なる可きを看破し、俄に腹痛と稱して別室に退き、湯藥を呼び、形勢の變化を待つて居たり。秀吉が退坐の後、果して議論百出、而して遂に秀吉の豫期の如くに進行す。這般の驅引に於て、秀吉の、甚だ明敏なるを見よ。

●秀吉が三法師擁立の議、漸く端緒に就く。勝家、更に佳日を選びて、三法師推戴式を擧げん事を提議し、問題は一轉して、信長の遺領處分を議し、次いで大名、小名の目錄調製に著手し、筆頭に、勝家を、次に瀧川一益、次に長秀、而して第四位に秀吉を置かんとす。

●秀吉は、大名、小名の第四位を以て甘んずる者に非ず。此の際、天下に志ある者、決して此の位他に居る可きに非ず。果然、秀吉は突として起ち、三法師の傳たらん事を願へり。其の理由は、彼が年既に老いて出世の望無き事、信忠と親善なりし關係より、三法師に對するの感情

も亦た切なるものありといふに在り。
 ●秀吉が信忠と親善なりし事は、一般の承認するところなり。満座、彼の衷情を察し、異議無く、其の希望を容る。此の如くして、大會議の形勢漸く秀吉の轂中に落ち来る。

其六

●秀吉が三法師に對するの態度は、彼の敏靈なるを見るべし。群雄、此の大膽と、輕妙の才とを缺く。

●吾輩、嘗て好角翁と語りしに、全盛時の常陸山が十歳ばかりの子供と、土俵の上に角逐して自ら輒轉反側しつ、如何にも眞成に投げられたるやうに見え、其の操縦の巧妙なるに驚きしといへり。大家、往々、這般の輕妙なる技術を有するなり。

●諸將、辭して旅舎に就くに、秀吉ひとり三法師に謁す。幼兒は人を恐るればとて、特に、遠くより、三室を隔て、拜謁し、三法師の恰憫なるを賞揚して退出せり。

●秀吉、旅舎に歸り、急に數十の工人を召し、人形鳥獸等の玩具を作らしめ、翌早朝、又た登城して、三法師に謁して其の歡心を買ひ、其の翌日、重ねて進謁し、玩具を獻すること例の如く、此の如くして、全く、三法師を懐柔し畢る。推戴式の時に至つては、秀吉、既に、三法師

を抱いて高座に在り。

●三法師は秀吉に抱かれて安然として嬉べり。諸大名、進んで敬禮すれば、秀吉、乃ち一々、これに對し、輕き答禮を與ふ。

●諸將、悉く宿舎に歸り、當日の事を話す。皆曰く、今日の事、三法師に敬禮するに非ず、秀吉に敬禮するなり。或はいふ、彼に致されたるなり。勝家も亦た苦笑せざる能はず。事實に於て、群雄、全く、秀吉に致されたるなり。

●勝家、竊かに一盆等と謀り、祝宴の日を以て、秀吉に迫つて、詰腹を切らしめん事を謀る。謀、頗る密、而して長秀、深夜、密かに秀吉を訪ひ、密談數刻にして去る。秀吉、合掌以て、其の後姿を拜すること久し。

●長秀の密告無かりせば、秀吉、殆んど死地に陥る可かりしなり。長秀、歸るの後、秀吉、急に黒田如水、中村一氏等を召して、後圖を託し、病と稱し、竊に急行して、姫路に歸り去る。

●秀吉脱還せるを以て、勝家の計畫水泡に歸す。勝家等、同志の中に、必らず密告者ある可きを思ひ、稍、疑惑を生ず。然れども之を探究するの、秀吉の注意を喚起し、事、却つて不利に陥る可きを思ひ、暫らく不問に附して歸國の途に就く。

其七

●三法師擁立の事、秀吉、著々、群雄を制するを見る。秀吉と勝家等は、譬へば高手下との對場にして、秀吉は著々、機先を制し、而して秀吉の一著手は、勝家等に諒解せられず。秀吉の後塵を追うて頓足すれども追及するを得ず。

●信長の遺領處分に就き、俗説に、大阪城を池田信輝父子に託すといふは誤なり。秀吉、此の時、早く既に天下に志あり。明らかに、大阪城の形勢を辨知す。川角太閤記に「上様の御跡、御次可被成天下人へ目出度可被相渡候といへり。

●秀吉が大阪城を重要視するの態度は、則ち彼の大志を見る可し。然れども群雄、皆、秀吉よりも低處に居り、小觀す。能く秀吉の心事を看破し得ざりし。

●秀吉と信忠と親善なりし一事は、彼の人物研究に於て注目し値す。彼は、信忠と親善なりしは、ひとり彼が巧みに信忠を籠絡したりといふには非ず。或は氣質の投合するものありしやも知れず。秀吉は信長に宜く、同時に、信忠にも宜かりし。餘人の及ぶ能はざるところなりし。

●彼は信忠と親善なりしといふを以て、三法師擁立の提議に對し、多大の同情を得たり。而して彼と信忠との關係に就いて俗説多し。或は、此の二人者の間に男色の關係ありしといふは、

齊東野人の説のみ。信忠、少年たりし頃、秀吉、到底、未だ接近するを得るの地位にあらず。

●或は、信忠、小谷の方を秀吉に嫁せしめん事を信長に請ひしに、信孝、反對して、遂に勝家に嫁せり。かくして信忠、秀吉と信孝、勝家との對抗的關係を醸成せりといふも、俗説なり。

●淺井氏亡びし時、秀吉には正妻杉原氏儼然として在り。此の時に於て、信忠、小谷の方を秀吉に嫁せしむ可き理由無し。

●秀吉其の才幹を以て信長に重用せらる、而して其の快活、潤達なるは、年若き信忠にも喜ばれしなるべし。彼が寸分も隙の無き人物たりしは、想像するに餘あり。

●總べて前代の元老は、假令、忠直、嚴格なるにもせよ、其の繼承者には、多くは好まれざるものなり。秀吉が信長に宜く、信忠に宜しく、續いで三法師を擁立したりしは、此の如き大勳臣には稀有の例となすべし。

●吾輩、三法師と秀吉とを記して、信長の後に三法師ありしは、秀吉の爲に、天賜の麒麟兒なるを思ふ。

大徳寺の法會

其一

●大徳寺の大法會といふは、舊劇に於ては、秀吉の生涯に於ける尤も華々しき舞臺の一なり。然れども事實に於ては、勝家等、逸早く卻走したるが爲に、何等の活劇を演出すること無く、大法會は秀吉の獨舞臺に歸したるなり。

●勝家、一たび秀吉を逸するを以て再び之を誘殺するの好機を得るに急なり。秀吉、姫路に歸るの後、間も無く勝家の使者來り、亡君の爲に、紫野に於て大法會を執行せん事を促がす。秀吉、能く其の心事を諒解す。直ちに返書を與へて曰く、亡君の大法會、古刹に於て執行す可からず、宜しく新に一大寺を建つ可し。

●勝家、秀吉の返書を得て喜ぶ。彼、必ずしも大寺を新建するを思はずと雖、秀吉を誘致するを得るが爲に、暫らく其の意見に隨ふ。而して秀吉の意、固より新建にあらず、唯だ新建に託して、期日を延引し、以て、準備の時日を得んとするのみ。

●大徳寺既に成り、信長の木像も亦た成る。勝家、屢、使を遣はし秀吉の上京を促がす。秀吉間牒を諸國に放つて、諸將の動靜を偵知し、則ち始めて、上京の時日を確答す。

其二

●秀吉は用間に長ず。用間は兵に必要なもの、孫子に用間の一篇あり。勝家は用間を能くせず。故に、勝家の動靜は秀吉に知られ、秀吉の動靜は勝家に知られず。用間の密なるは、兵家の第一策なり。

●諸侯の動靜、秀吉の豫期に違はず。勝家は兵五千、一益、長秀等も亦た各數千騎を率ゐて上京す可く、殺氣、大法會に漲らんとするの形勢あり。秀吉乃ち豫め人を遣はし、洛外に、遍ねく宿舎を徵發し、部下の將士の名を特書せしめ、以て大に氣勢を張らしむ。而して勝家の間牒の來れるを知り、特に、二萬餘の大軍を率ゐて姫路を發す。

●勝家等、秀吉の勢威の甚だ盛なるに驚く。而して間牒の報告を得、其の大軍を率ゐるは、必ず期するところあるを思ひ、先づ三法師をして避けしめ、尋いで自ら信孝を奉じ、夜、匆皇として京都を發して岐阜に歸る。

●秀吉、入京すと雖、寂寞として一敵無し。悠然として京都に陣し、使を岐阜に遣はし、却つて其の上京を促がす。勝家等答ふる能はず。秀吉、乃ち養子正勝と共に、紫野に於て、一七日

の法會を行ふ。時に天正十年十月なり。

●紫野の大法會は、事實に於て、秀吉一門が、亡君を追弔せるなり。舊劇に於ける燦爛たる大法會の眞事實は、此の如し。

●此の晴の大舞臺に於て、亡君の靈前に、秀吉一門の外、元老宿將等の焼香する者無かりしは、豈、勝家等の大耻辱に非ずや。彼等は、何の辭を以て、舊君の英靈に答へんとするや。京童は、定めて奇句警句を以て、勝家を笑ひしならすんばあらず。

其、三

●紫野大法會の月、秀吉、假城を山崎の北なる寶寺に築き、京都、安土間の往來に便せり。形勢、益急にして姫路にては、最早、時局の必要に應ずる能はざる可きを以て、寶寺に出づ。彼の京都に入らざるは、彼の老練なる所以なり。

●秀吉、先づ山崎決戦に群雄の膽を奪ひ、次に、岐阜の大會議に、三法師を抱いて、諸侯をして禮拜せしめ、群雄の頭を抑へ、紫野の大法會に、大に其の威武を張る。一步毎に、彼の勢威、隆然として日の昇るが如し。勝家、事毎に敗れ、焦慮に焦慮を重ねて、薪の燃えんとするが如し、遂に、干戈を以てするの外、此の問題を解決するの手段無きに至れり。

●舊劇に、紫野の大法會に秀吉が三法師を抱いて勝家を屈するの脚色は、岐阜の大會議を混交せるものといふ可し。

●紫野大法會の一舉、秀吉、一兵に軋らず、唯だ勢を以て敵に克つ。孫子の所謂、戦はずして勝つ。兵に於て上の上なるものなり。秀吉は、つねに戦はずして勝つを期す。此の一舉は、殊に、其の上乗なるもの、孫子をして見せしめば、まさに讚辭を惜まざるべし。

久秀と光秀

其、一

●久秀と光秀とを聯想する者、嘗に、吾輩のみならず。舊劇に於ては、光秀を以て久秀の遺子となせり。吾輩謂ふ、久秀は戰國を創開せる叛逆人にして、光秀は戰國の叛逆人なり。

●古今、叛逆人は珍らしからず。然れども、光秀は殊に叛逆の鋭感を與ふ。彼と光秀との外、美濃の齋藤道三も亦た顯著なる叛逆人なり。道三も光秀も、叛骨は久秀に及ばず。

●舊劇に於て、久秀、道三、光秀の三人を聯絡せしめたるは、興味少からず。此の三人は、如何にも血統的關係あるらしく見ゆ。光秀の『時は今、天が下知る五月哉』の句を附會して、時

を土岐とし、以て、此の三人者を連結せしむるなり。時と土岐と偶合とはいへ、光秀と久秀とを結合せしめたるは、脚本として好思向たるを失はず。

其二

●今の石龍子をして、久秀の性相を觀察せしむれば、果して何といふ可きや。久秀は果して叛骨突起して、以て、異相を呈したる可きや。久秀ほど叛逆人の好標本たる可き人物無く、又た彼ほど屢、叛逆を敢てしたる者も無し。

●久秀の骨相は一箇の研究題目ならずんばあらず。彼は、或は、舞臺に見る如き、癡惡す可き悪相にては無かりしやも知れず。若し、非常の悪相を備へしめば、一生の間に、彼ほどの叛逆を遂行する事を得ざりしなる可し。

●彼をして悪相なりしとすれば、彼に、非凡の表情と才幹と有りしを疑はず。世間には、屢、叛逆を試み、叛逆の常習犯となれる者あり。久秀の如きは、實に、叛逆の常習犯の最も甚だしき者なり。彼の如きは、叛逆に生れて叛逆に死せざれば已まず。身、死するの後、其の叛逆の血を、子孫に遺傳せしめずんば已まず。

●室町の末は、下剋上の世の中なり。久秀の一身は、下剋上を象徴する者ならずんばあらず。

傳へいふ、久秀、一日、信長に謁する時、座上、家康あり。信長、彼を家康に紹介して曰く、此の爺、天下の及ばざるもの五あり。將軍義輝を弑せる一なり、三好義長を弑せる、其の二なり、東大寺を焼き、大佛を滅せるは、其の三なり。義繼を挾みて天下に號令せるは、其の四なり。而して終に、義繼を弑せるは、其の五なりと。

●傳説には、久秀、此の一事に憤慨し、慙恨の極、信長に叛くに至れりといふ。或は、之を評して、久秀は一代の奸雄、一場の戲言に憤りて叛旗を擧る如き熱狂兒に非ずと。吾輩を以て見れば、此の説必ずしも當らず。

●久秀は、固より冷靜にして横道者なり。然れども叛逆性の敏捷なるは河豚の腹の如し。一撃、忽ち河豚の腹を膨らますに足れり。久秀の横道を以てすと雖、案外、容易に、其の腹を膨らせしなる可し。

●久秀は信長に對する反抗のみにても一再にして止らず。彼の叛逆に於けるは、必ずしも一生一代といふには非ず。若し信長にして、此の如く、久秀を、家康に紹介したりとせば、久秀必ず憤慨して、叛逆を思ひしなるべし。

●此の時、久秀、既に老爺にして、家康は若年なり。白髪にして、若年者の前に、其の舊惡を披瀝せらるる如きは、彼の忍ぶを得るところに非ず。

其三

久秀の下剋上の罪、一にして足らず。其の一といふも、皆、死罪に當る。彼は、此の如き顯著なる叛逆者たるに係らず、後の主君たる者、悉く彼を重用せざる無きを見れば、彼は、豈、大奸、忠に似たる人物に非ずや。

●彼は、信長に對しても、謝しては叛き、叛きては謝し、最後に、天正五年八月、叛きて、志貴山に據りし時の如きも、信長、友閑法印を遣はし、叛意を訊し、且つ慰諭するところあらしめたる如き、彼が幾回、叛くも、其の主に見離されざるは、注目に値せずんばあらず。

●久秀に比すれば、光秀の器は遙に小なるべし。信長の眼中に映する久秀は、光秀よりも、重くして、有用の人物なり。信長、生平、屢、光秀を侮りしも、久秀を侮らず。

●光秀の智は、遠く久秀に及ばず。久秀は、鎌倉の北條氏を以て自ら任じ、陪臣を以て國命を執るを辭せず。光秀の如く、自ら覇者の形式に居らん事を求むる者に非ず。

●久秀にして、將軍を弑して、自ら將軍となりしならば、彼の生涯は、叛逆を再びするを得ざりしなり。彼は叛逆すと雖、自ら舊主の地位を占むるに非ず。是れ、久秀と光秀との相違なり。

●久秀は、其の意に適せざる君主を交迭し、或は弑逆すと雖、彼は自ら君主たらんとはせず。

彼は飽くまで臣下を以て自ら甘んず。而して彼は、臣下を以て、下剋上を事としつ、ある者ならずんばあらず。

其四

●久秀、かぬて質子二人を信長に奉ず。志貴山の叛亂に、信長、命じて質子を殺さしむ。質子、長は十三、次は十二、共に、稀有の美少年なりしといへば、久秀の風貌も、或は想像す可き乎。

●此の二少年は、其の美貌に似ず、極めて大膽不敵なり。此の意味に於ても、彼等は、能く久秀の面目を傳へたるもの乎。彼等は、堅く助命の憐愍を辭謝し、京都の六條磧に斬らる、時も刑場に坐し、從容として合掌し、高聲、以て念佛を唱へ、刀下り首飛べども、稱名の餘聲、猶ほ人の耳底に残りしといふ。

●久秀の人物は、此の二子に依つて代表せられしなるべし。彼の少年時は、全く、此の如き美少年なりし乎。而して此の二少年をして成長せしめば、果して如何なる人物となりしやらん。

當時定めて、末、恐ろしき少年と想はれしなるべし。

●信貴山の戦に、攻圍軍の首將は信忠なり。諸將、信盛あり、光秀あり、順慶あり、長秀あり、秀吉も亦た有り。如何に久秀と雖、負けて耻かしからぬ敵なりし。彼、信盛、順慶の詭計に掛

り、此の名城の、計らずも危殆に瀕するや、天主閣に登り、火を放つて死す。
 ●久秀、其の最期に、目眇、悉く裂け、「吾、骸骨となるとも、信長の死然を觀ざらんや」と言ひ、憤死す。其の子久通、戰敗れ、力竭きて捕獲せらる。
 ●彼が最期の憤怒、及び其の憤言、骸骨の一語、悉く、劇の脚色を爲さざるは無く、光秀が本能寺に於て、久秀の骸骨を以て、信長を打つといふ脚色も、此に因由せり。
 ●光秀、志貴山の攻圍軍に加はり、久秀の最期に際會して、始めて父子の血統を知り、是より久秀の志を志とし、信長に報復するの志あり、つねに久秀の髑髏を懐中して、千歳一遇の機會を待ちしといふは舊劇の脚色なり。

其五

●吾輩、嘗て前後二回、舊劇の舞臺に、本能寺の合戦を見たり。初は、光秀は左團次、後には八百藏なりし。光秀の人物は、此の二人の役者に依つて、頗る面目を異にせり。
 ●脚本に依れば、信長入京して本能寺を旅館とす。光秀伺候す。信長其の罪を責め、死を賜ふ。蘭丸、終始、信長の左右に侍す。九寸五分を三寶に載せ、光秀の前に置く。
 ●其の時、光秀少しも騒がず。かねて覺悟したるところなりとて、衣を脱げば、白衣を著け、死

裝束を爲せり。徐ろに懷を推してひろげ、九寸五分を推し戴く。まさに自裁せんとする時、偶々攻太鼓聞ゆ。信長驚き、蘭丸をして物見せしむるに、まさしく敵軍の來襲なりと報ず。
 ●信長、旗印を問ふ。蘭丸答ふ、桔梗の紋なり。信長いふ、其は見覺あるやうなり。蘭丸も亦た、見覺ありといふ。不圖、光秀の紋章に想到す。光秀の紋章は桔梗花なり。「ソレ撃て」といふ。劊手、刀を一揮する刹那、光秀、體を轉じ、忽ち九寸五分を執つて信長に擲ち、其の腹に中つ。
 ●八百藏の光秀にては、九寸五分を手にして、如何にも陣太鼓の音、聞えさうなものといふ氣分を示し、沈著の氣分無し。左團次の光秀は泰然として餘裕あり。攻太鼓聞ゆと雖、相關せざるもの、如く、或は當年の光秀よりも、却つて好度胸なるやも知れず。
 ●光秀の軍勢、早や本能寺を占領す。光秀、高坐に登り、久秀の髑髏を出し、信長を打擲す。信長、苦るしき息を吐きつ、一人の來援者無きを恨みたる可し。彼は「時は今」の句を想起して、始めて光秀の素性を知る。
 ●久秀の血を受け得たりとすれば、彼の叛骨は怪しむに足らず。而して彼が信長に對する叛逆は、同時に復讐たるなり。

其六

●歴史に見たる久秀が最後の叛逆は、光秀と相似たるものなくんばあらず。久秀が叛逆の動機は、信長の虚に乗じて爲す有らんとしたるにて、必ずしも天下を狙ひしといふには非ず。

●信長に對し、本願寺光佐の勢力、驚く可く、而して毛利氏の援助の力、爲すに足る可きものあり、此の時、信長の居國に接近し、大和に兵を擧ぐ。信長と雖、必ずす胃を脱して、講和を提議するならん。假令、講和に到らずとも、幾多、有利の條件を實行するを得たる可し。

●光秀の擧兵も亦た此の如し。信長の勇將、精兵概ね遠方に出戰するに乘じ、俄に兵を擧げて斃すを得たり、然れども秀吉先づ電馳し來り、すべての空想、破壊せられたる事、久秀の場合と異ならず。

●久秀の叛逆性、久しく發揮されざりし。彼の叛逆性は、唯だ發揮の好機會を待ちしのみにて嘗て、衰伏したるに非ず。譬へば休火山の如く、遂に、爆發せずんば止まざりしなるべし。

其七

●久秀が、信長に執着的の憤恨を抱きしといふ事、光秀の大不平を、聯想せしむるに足るもの

あり。脚本家が、此の二人者を結合せしめたるも、一には、これに由る可し。

●久秀、光秀、必ずしも恐る、に足らず。其の念力は則ち怖るべし。此の二人者の連想、及び脚本の主人公としての價值、一に唯だ、此の念力を主眼とするものなり。

●信長は久秀を遇すること頗る厚く、世臣宿將をも超ゆるの觀あり。或は、之を評して、信長一生の失策となせり。然れども彼が一生の失策といふ可きは、久秀の重用のみならず、併せて光秀の重用も、其の一に數へざる可らず。

●信長が、久秀、光秀を重用して、遂に、其の身を亡ぼすに至りしは、彼が才を愛するの急にして、其の品性を顧みるの違無かりしに由らずんばあらず。元と、信長は創業の人、創業の人は才を好むの人。此の如き人物に非れば、能く創業の偉業を建つことは能はざりしならん。

●才を愛する者は才に誤らる。信長の、久秀、光秀に於けるは、即ち其なり。

●「川立は川に死す」と言へりし如く、叛逆の久秀は遂に叛逆に死せり。光秀は久秀の如くに、叛逆の常習犯にてはあざりき。然れども彼も叛骨、逞しくして、遂に叛逆に斃れたる者ならずんばあらず。

●天刑病者が、遂に天刑病に到達すると同じく、叛逆人が叛逆に終るは、其の行く可き途ならずんばあざり可し。

其八

●久秀を、大和の國より見れば、又た一箇、記念す可き人物たるを失はず。由來、大和國は、合の歴史を有せず。開闢以後、大和を統一する者出でず。久秀は、始めて、殆んど大和の全斑に涉つて大勢力を得たる人物なるべし。

●久秀、志貴山に擧兵の時、豫め本願寺の光佐、及び雜賀の亂民と謀を合せたり。彼が、大和に勢力を得たる所以の實情も、略ぼ想像されざるに非ず。

●當年、大和に於て、久秀と拮抗して、勢力を争ひつゝ、ありたるは、則ち筒井順慶なり。順慶と久秀とは、鎬を削つて争ひたり。順慶は、大器に非ず。然れども其の才幹、大和の一國に、地步を占むるに足る。

●久秀と順慶と相凌轢したるは、順慶が信長に接近したるが爲、久秀をして、遂に信長を離れて、叛逆を敢てするに至らしめたる眞事情の一ならずんばあらざる可し。

●秀吉、大和大納言をして、大和を統一せしめんとせしが、統治、日淺く、其の成果、見る可きものを留めざりし。

時運到來

(信長歿後一年間に於ける秀吉の活動)

其一

●曠世の大英雄と雖、時運到來せざれば何事をも成す能はず。秀吉、壯年より信長の幕下に屬し、備さに辛酸を嘗むること廿餘年。彼ほどの大才を抱へて、大に志を伸ばすを得ざるも、亦た久しといふべし。而して本能寺の變、勃發以來、僅に一年の間、秀吉一身の變化、活動の顯赫なる殆んど人目を眩するに足るものあり。一年前の羽柴筑前は、一年の後、居然として一世の覇者となれり。

●此の一年間に於ける秀吉の活動ほど目覺ましきものは、彼の生涯にも得難かるべし。六月一日、本能寺の變起りし時、秀吉、中國より疾驅して歸り、十三日、山崎の決戦に光秀を破り、岐阜の大會議、紫野の大法會を経て、其の十二月より翌、天正十一年春に涉つて、江濃を徇へ四月賤ヶ岳の一戦に勝家を破り、長驅して越前、加賀、能登を平け、歸つて一益を降し、信孝を倒し、信長の歿後、恰も一年にして、其の遺業悉く秀吉の掌中に歸せるのみならず、秀吉

の新版圖は、更に信長よりも大なり。
 ● 順風に帆を揚ぐといふとも、此の一年間、秀吉の成業の速かなるに比す可らず。眞に是れ、一瀉千里の一語に盡く。此の間、秀吉の精力旺盛、其の頭腦の敏靈、剛健、身心相應じて、些の遺憾無く、遺算無きを見よ。
 ● あらゆる立志編も、秀吉の傳記の前には、其の聲價を失ふ可し。千百の教訓も、一冊の秀吉傳の感興横溢するに若かず。

其 二

● 紫野大法會の事ありし以來、秀吉と勝家との干係は、公然、破裂せるものなり。然れども時漸く霜雪の候に向ひ、勝家の爲には、越前より雪を犯して兵を出す可らず。此に於て、勝家は一盆の計を用ひて、暫時、秀吉と講和するに決し、秀吉と親善なる前田利家をして、居中、斡旋せしむ。

● 勝家は一世の雄たるを失はず。一盆の智も亦た用ふ可し。然れども二者の智勇を併せて、秀吉に敵するに足らず。而して屢、小策を弄して秀吉を瞞著せんとす。惜哉、好漢、自ら知らず又た敵を知らず。抑も自ら知らざるは智者の事に非ず。勝家の智才、秀吉に角するに足らずし

て、好んで角せんとしたるは寧ろ憐む可らずや。

● 利家は秀吉と舊友にして、尤も親善す。秀吉、利家の女を養うて子とす。實は、質として、以て、益、締盟を固くするに非ざるを得んや。

● 秀吉、利家の斡旋を快諾し、一條件を提出す。明春、三法師の上京を約し、秀吉其の事に當る可く、而して岐阜より大津に至るの間、沿道、修築の爲、材木を得可く、柳瀬山林の伐採の承諾を得んとするに在り。

● 勝家は報を得て、吾策當ると思へり。乃ち速かに要件承諾の報を與ふ。豈計らんや。勝家承諾の報を得し時、秀吉も亦た竊かに舌を吐いて、「吾策、大に當る」と思はんとは。

● 互に、吾が策當ると思ふ。孰れの策か果して當れる。勝家の策、當らず。秀吉の策、ひとり大に當る。勝家、秀吉を陥れんとして、却つて全く秀吉の術中に陥れり。然れども此の事、勝家、深く秀吉を恨むを要せず。端を啓く者は勝家なればなり。

● 秀吉、秀長を遣はし、勝家に答禮すと稱して、實は、越前の形勢を観察せしめ、積雪の實況を見て歸り報するに及び、乃ち大兵を率ゐて、急に江濃を徇へ、柳瀬の山林を伐採し、其の材木を使用して三砦を築き、以て、勝家の南下に備ふ。

● 見る可し。勝家が秀吉を陥る可き奇策の一と思ひし所以のもの、却つて悉く自ら陥る可き

となれり。先んずれば人を制す。秀吉が、北國の積雪季節に、江濃を徇へたるは、機先を制したるなり。若し、暫時を緩くせば、恐らくは敵に致されん。

●十一月中旬、秀吉、五萬の大軍を以て急に長濱を襲ひて、城將柴田勝豊を招降す。勝豊は勝家の義子、然れども生平、勝家と隙あり、且つ佐久間玄蕃と善からず。勝豊、既に秀吉に降り、勝家、南下の門口、全く塞がる。

其 三

●此の年の暮より、翌天正十一年の春に到る、年頭年末の際に於ける、秀吉の態度は特記せずんばあらず。吾輩、此の稿を草する時、今、恰も年頭年末に當り、感興殊に深し。

●十二月廿三日、秀吉、兵を收めて國に就かんとし、安土に往き、三法師に謁して年末の禮を修め、多くの獻品を爲し、二十六日、寶寺に歸る。此の頃、彼の根據地は尙ほ姫路に在りと雖活動の策源地は寶寺に在り。

●秀吉、寶寺に於て、天正十一年の元旦を迎へ、賀禮を畢るや、直ちに馬を驅つて姫路に下り夜半、城に入る。それより祐筆を召し、將士の恩祿、太刀、小袖、馬匹、飼養料等に至るまで、く之を計上せしめ、奉行を召し、五日の間に、之を將士に分配すべきを命じ、事終れば、正

月二日の日、午なり。乃ち飯を喫して寢に就き、約一晝夜を熟睡して、三日の午に到る。

●三日、午後、秀吉、熟睡より醒め、將士の年賀を受け、七日、姫路を發して入京し、天皇に拜謁して、新年を奉賀し、九日、安土に三法師に謁し、それより柳瀬方面を觀察し、寶寺に歸る。

●秀吉が成業の精神を見れば、シーザーが所謂「吾來り、吾見、吾勝てり」といふもの、必ずしも秀吉に向つて誇るに足らざるを見る。秀吉の敏靈、精悍、剛健、蓋し古來、極めて得易からず。

其 四

●秀吉が勝家を攻むるは、凍港に向つて、敵艦を封鎖するが如く、封鎖艦隊は、自由に外洋に活動しつゝ、あるにも似たり。秀吉、一月十三日を期して、諸軍を草津に會し、南下して一益を伊勢に窘迫するや、忽ち江北に佐久間玄蕃、突出の急報あり。秀吉、急馳して長濱に至る。

●秀吉、長濱に至りし時、二月八日也。彼、敵の動靜を聞き、僅に、一日を後れしを憤ほること深し。蓋し、彼が警報に接したるは、七日の事にして、玄蕃、一萬五千の大兵を率ゐて南下し、其の先鋒は、關ヶ原までも進みたるを、僅に、一日の差を以て、秀吉は、敵を逸したるな

り。

●他日、秀吉、賤ヶ岳の大捷は、此の時の經驗を繰返したるものならずんばならず。彼は眞に半日の差を以て、接觸の好機を逸したることを千秋の遺恨とし、これより後ち、機會の再來を覘ひ、虎視眈々として、南下すと雖、遠く去らず。則ち秀吉の胸中には、此の時以來、早く既に「理想の賤ヶ岳」ありしなり。

●女蕃と雖、二月七日の突出の好成績なりしに鑒み、爾後、慎重に慎重を重ねて、必らず秀吉と接觸せざらん事を期せば、勝家の運命も尚ほ若干の歲月を保つ可く、彼の如く、脆く、挫折する事は無かりしならん。

●秀吉、乃ち大軍を列ねて、賤ヶ岳の敵軍を壓迫す。勝家も自ら來りて、秀吉と、對陣し、兩雄、雌雄を決するの大舞臺を現出す。此の間、信孝、一旦、講和したるを、秀吉の慮を覘ひ、再び南方に兵を出す。然れども此の事、秀吉かねて期したるところなり。

●秀吉、直ちに南下して、四月十七日、大垣に至り、十九日、自ら信孝を岐阜に攻落せんとし、夜、猛雨の爲に果さず、延引して廿日に至りしは、實に、天意、賤ヶ岳の奇捷を以て、秀吉に授くるかと疑はる。

●四月廿日の午後、急使、柳瀬より大垣に來り、敵軍の突出を報ず。秀吉、欣喜、雀躍、馬に鞭ち、眞先に馳せて、麾下を率ゐ、電奔して賤ヶ岳に至る。使者を農夫に混じて、前田利家の陣營に到らしめ、秀吉の爲に、反撃、若くは局外中立を爲さん事を求む。利家、局外中立を約す。秀吉、既に敵軍と接觸し、而して利家、援けずとせば、勝家は、片腕を失へる蟹の如くならざるを得ざるべし。

眞 五

●勝家は女蕃よりも能く兵を知る。彼は、力めて秀吉と接觸するを避け、大兵を按じて、偏に自重す。秀吉南下の慮を覘ひ、女蕃が強ひて突出を請ふ時、勝家、僅に之を許し、一捷、即刻退陣す可きを嚴命す。

●鬼女蕃は猪突の勇のみ。其の勇猛、嘉すべしと雖、兵を知らず。秀吉より見れば、驅使するを得ば、方面の鐵壁たるを失はず。女蕃、賤ヶ岳の大敗に、間道を敦賀に奔り、足を傷け、農夫に捕獲せられし時、秀吉、女蕃の爲に、無禮を咎めて、農夫を斬り、女蕃を優遇し、頗る其の勇を惜むの意あり。然れども流石に女蕃は勇夫なり。生を欲せず、自から請うて、切腹を辭し京都を引廻はされ、六條積に斬らる。

●女蕃は、山中幸盛と好個の對照を爲すべし。幸盛は極めて執著。其の執著力に於て古今に

比類少し。女蕃は則ち極めて木強。其の木強、猪突、又た一世の快男兒とするに足る。東西相對して、共に、戰國武士の一典型たらずんばあらず。

●女蕃、中川清秀を賤ヶ岳に襲ひ、曉天より黄昏に至るまで戦ひ、清秀戦死す。女蕃、且つ驕り、且つ疲れ、此に宿營して歸らず。勝家より傳令六回に及ぶや、却つて勝家を、盡せりといふに至る。

●此の夜半、女蕃等、困睡の夢は、秀吉の殺到に驚破さる。醒めて見れば、遠山、近山、すべて敵ならざるは無く、松火、天に連る。女蕃、千悔すれども及ばず。黎明、秀吉、勢に乗じて掩襲し來り、女蕃、一朝にして、總敗軍に歸す。此の時、賤ヶ岳七本槍の奇捷あり。

●秀吉、女蕃の敗走を追うて、勝家に迫り、毛受勝介、勝家に代はり殿戦して暫らく敵を防ぐも及ばず。秀吉、府中の城門を叩きて、利家と暖談し、進んで北ノ庄に勝家を亡ぼし、城中火舉るを見て、直ちに長驅して加賀に入り、能登にも及び、越中の佐々成政を壓迫して、南歸し、信孝を攻めて自裁せしめ、一盆を降し、六月に至りて、全く勝家の一黨を全滅せしむるに至るまで、快刀を以て竹を割るが如く、節々、順次に、刀を迎へて解くるの概無くんばあらざりし。

其 六

●吾輩、少年時、越前の福井に在り。又た嘗て、雪中に再び府中を過ぐ。福井は當年の北の庄則ち勝家の居城あり。郷人、嘖々として勝家を説くを聞き、其の英風を欽慕せし事あり。蓋し民政及び土木、治河の美事、勝家の名に託するもの少からざるを見れば、勝家が民心を得るの深きを知る可く、其の人、凡ならざるを想ふ可きなり。

●今、福井の公園に愛宕山あり。山頂に、織體天皇の記念像立てり。天皇、少壯時、此の國に居玉ひ、九頭龍川を治め玉ひし偉徳を記念するなり。此の山頂は、北庄攻圍の時、秀吉、床几を置き、城中を俯瞰せしところと傳説す。

●吾輩、小學生たりし時、父老、頻りに勝家を崇拜するを聞けり。勝家の武勇は、御伽噺の主人公となれり。其の説にいふ。秀吉、愛宕山頂に、床几に腰掛け、遠く足羽川を隔て、北庄を望む時、勝家、ひとり天主閣に登り、強弓を以て、遙に秀吉を射る。箭、正しく秀吉の頭上に向つて飛來するの刹那、加藤清正、侍して左右に在り。突嗟、床几を引き倒し、秀吉仰けに轉び、箭は空しく山頂を過ぎ去ると。此の英雄談、三十年來、吾輩、印象して今日に至る。

●吾輩、數年前、再遊して福井に至り、舊城を憑吊し、愛宕山に登臨す。三十年前の英雄談を

回憶し、感慨に堪へざりし事あり。古寺を尋ねて、勝家の木像を見しに、風貌、豪宕、頗る英姿あり。當年の鬼柴田の面影を偲ぶに堪へず。蓋し、勝家、秀吉に一籌を輸すと雖、織田氏の元老第一たり。其の人、傳ふるに足るもの無くんばあらざるべし。

其 七

●北庄陷落の一幕は、頗る悲壯の氣分に満てり。勝家、將士と訣別の宴を爲し、小谷の方に脱出を勧む。小谷の方は信長の妹なれば、秀吉と雖、危害を加ふる無かるべしといふ。小谷の方聽かず。小谷の方始め淺井長政に嫁し、三女を擧ぐ。長政亡び、勝家に改嫁するに當り、悉く三女を率ゐて來る。
●勝家、三女を秀吉に送つて養育を託し、小谷の方と共に、天主閣に登つて、徐ろに自殺す。三女、長は阿茶々、後に秀吉の妾となる、則ち淀君なり。次は京極高次に、季は徳川秀忠の夫人となれり。
●愛宕山頂に立ち、勝家を思ふ。淀君の運命も亦たただ奇なる哉。而して小谷の方の心事も、甚だ憐む可し。彼女の最期の暮は、感想的なり。一個、悲劇の好脚色たるを失はず。
●詩として見たる北庄の落城は、興趣殊に深し。此の時、落城の中より脱出したる三女の中の

二人が、秀吉、秀忠の妻妾となり、二人者の子女、秀頼、千姫、婚を結んで夫婦となり、大阪の落城に到る。最期の淀君は、嘗て、北庄の脱走を回憶したることありや。

其 八

●秀吉、勝家を追うて府中に、利家を訪ふの一場、頗る興味あり。また以て、秀吉の人物の半面を識る可き好話柄を有す。
●先きに勝家、府中を過ぎ、利家と訣別して去る。次いで秀吉到る。城兵、發袍せんとするを秀吉、制止し、自から城門に歸り、利家と呼ぶ。利家、恭しく書院に招かんとすれば、秀吉、突如、台所より入つて、利家の妻を呼び、夫人、々々、養女を語らんとす。
●秀吉、利家の居室に到り、草鞋の儘、縁に腰掛け、暫らく快談す。利家の妻出で來る。秀吉、即ち今日の大捷、利家の賜なりといひ、合掌して謝す。秀吉又た播州の近信を語り、養女の成長を告ぐ。夫人また秀吉の柱駕を以て、非常の光榮となす。
●秀吉、利家の妻を顧み、冷酒一杯、以て、此の行を壯にせよといふ。夫人乃ち酒肴を調へ來る。秀吉、一酌し、更に、夫人、一飯を恵めといふ。夫人、飯を捧げ來る。秀吉、すべて縁に腰掛けたる儘、喫し畢つて、即ち起ち、利家の一日の勞を借らんと言ひ、拉して城を出で、馬

首、直ちに北ノ庄を指す。利家の子、利長、偶、歸り來り城門に逢ふ。則ち父子ともに秀吉に隨ふ。

●賤ヶ岳の決戦は四月二十一日。秀吉、北庄に迫るは廿三日。北庄の落城は其の廿四日なりし。

勝？敗？關ヶ原！

其 一

●關ヶ原！勝？敗？關ヶ原！乾坤一擲の精神、沛然として發露するものは、「關ヶ原」の一語なり。「關ヶ原」の一語を聞けば、百世の下、尙ほ壯心躍つて已まず。

●天下分ケ目の意義を、尤も能く象徴するものは、關ヶ原の一語に過ぐるは無し。古來、大戰少しとなさず。然れども天下を二分して、其の二大勢力を擧げて、勝敗を、一舉に決するは、關ヶ原に於けるが如く、壯快にして、精彩あるものを見ず。ウオートルローの一戦の興味、唯だ僅に、關ヶ原と、東西相似たるものあるのみ。

●漢高、項羽、垓下の一戦は、稍、關ヶ原に似たり。然れども此の時、漢高と項羽と、勢運既に對等に非ず。垓下は花々しかりしとは云へ、勝敗の形勢、歴然として早く定まれり。垓下は

寧ろ壇ノ浦に近し。

●天下分目の興味に於て、關ヶ原は、秀吉、光秀の山崎決戦に髣髴たるもの無くんばあらず。然れども、山崎と關ヶ原とは規模、舞臺の大小を異にす。關ヶ原は山崎の大舞臺なるものなり

●關ヶ原！今、政海、風雲頻りに動く、風雲を觀測しつゝ、あれば、關ヶ原を憶ふ。

●乾坤一擲は、勇者の事なり。智慮ありと雖、大勇無くんば能はず。智慮を以て、天下分目の一戦に天下を庶幾せんと思ふは誤なり。天下を取る者は勇者ならずんばあらず。

其 二

●三成の智慮秀出するは、多く家康に譲らず。武略は家康に及ばず。彼、平生、才を負ひ、傲岸にして人望少し。之に反し、家康は恭謙、士に下り、以て士心を得たり。

●家康は、屢、狸爺を以て呼ばる。吾輩も、彼は、眞に狸爺なりしなるべしと思ふ。然れども此の大狸爺恐るべし。天下、家康を恐れざるは無し。三成、年壯氣鋭、ひとり、家康取つて代

はる可しと思へり。

●今日の語を以て言へば、家康、利家、輝元等は既に元老なり。三成、屢、之に接し、竊に、其の才智の敏捷を比較し、多く恐るゝに足らずと信じたり。此の輕信は、恐らくは、三成の大

敗を招致せし大原因の主たるものならずんばあらず。

●三成をして、今日に在らしめば、立派なる大臣なるべし。一省の長官としては力量餘あり。或は内務大臣たらしめば、極めて精彩に富める内務大臣たらずんばあらざるべし。首相としては、其の徳を疑ふ。

●秀吉の選抜したる五大老、五奉行は、大老は元老にして、五奉行が則ち大臣なり、各省の長官なるべし。日本は古より元老の國、秀吉の政治にも、元老無くしては治まらずと見ゆ。

其 三

●三成といへば、如才無き人物なりしなる可しと思はるれども、實は、太だ如才有りて、極めて不人望の人なりし。彼の智にして、此に至るは、勝敗の氣餘有りて、人を侮ればなり。

●秀吉は、三成の力量を識認し、拔擢、群を超えたり。三成には、戰國に處して軍功無く、何等の背景無くして、速かに此に至れるを見れば、彼の才、原敬。加藤高明の下に在らず。或は「一世の雄」を以て彼を遇するも必ずしも不當に非る可し。

●吾輩は、三成を以て、子加藤を聯想す。其の人格性行相近きものあるを思ふ。唯だ加藤は三成に比すれば、背景の燦爛たるものを有す。今の關ヶ原に於ける加藤の勝敗如何は、逆睹し易からず。

●公伊藤の生前、加藤が能く天下を争ふに至らん事を豫言したる者あざりし。尤も能く加藤を識認したる者は公伊藤なり。然れど公伊藤と雖、加藤の今日あるを豫期せざりし事、秀吉に能く三成の將來を豫知する能はざりしが如くならずんばあらず。

●子加藤を以て三成に比較する時、子加藤は必ずや大不平ならずんばあらざるべし。吾輩、此の對照は、不倫に非ずと信ず。而して勝敗を以て對照せんとするに非ず。其の人物趣味を以て言ふ。

其 四

●吾輩を以て見れば、輒近に於ける子加藤の態度は頗る勇氣を缺くもの無くんばあらず。若し今日の如くにして、前路、關ヶ原の一戰。彼の大勝に歸するありとせば、其は、恐らくは彼の力量の結果に非ずして、幸運の賜ならずんばあらざるべし。

●彼や智慮に富み、鬪氣餘あり。其の言論、つねに鬪氣の磅礴しつ、あるは、三成に敗竄、萬死窮境に陥りて、尙ほ諸侯を面罵して口を絶たざるにも似たるものある可し。

●秀吉の、光秀に於ける。家康の三成に於ける。意氣既に敵手を呑む。關ヶ原の一戰、家康に

勇あり三成に勇無し。三成をして勇あらしめば、關ヶ原を待たずして、家康に勝つ可き機會は幾回か有りしなり。

●天下に大事を爲さんとする者は、先づ其の身を忘れずんばある可らず。其の身を忘る、は則ち勇なり。其の身を忘る、に非んば、先頭に立ち難し。三成、勇無きが故に、家康の東歸を水口に掩撃する能はざりし。

●明智光秀の智は三成に及ばず、然れども勇は三成に過ぐ。三成は、本能寺の一擧を試むるの勇無き者なり。光秀も三成も、山崎、關ヶ原の大舞臺の座頭たる可き役者には非ず。

●光秀も早く家康の器を知る、故に、其の東走を、伊賀路に要撃せんとして、逸したり。三成は大兵を擁して江州に在りながら、見すく、家康の東歸を掩撃せざりしは、彼の勇、光秀に若かざればなり。

●其の身を忘る、能はざる者は、つねに萬全の策に出づ。萬全は、智に似て、實は怯者の事なり。一擧手、一投足の間に天下を争はんとする者は、萬全にては能はず。

其五

●「鬼の女房に鬼神」と言へど、時として、鬼の女房に菩薩なる事あり。三成と大谷吉隆との友

情は、管仲、鮑叔と雖、及ばざるべし。而して吉隆は武士として間然するところ無し。斯人にして三成と肝膽相許し、終に、三成に許すに一死を以てするに至る、友情の構成の不思議なる或は、想像の及ぶところに非ず。天意といふの外無し。

●尤も能く三成を識れるは吉隆なり。吉隆が三成に忠告せる所以を見れば、三成の人物論は、此に盡されたるを思ふ。吉隆は三成第一の大知己なるべし。吉隆は、かばかりの才識あれども人物の輪廓大ならず。帷幄の才にして、統帥の器に非ず。

●吉隆は越前敦賀の城主なり。家康の檄に應じ、會津攻の爲に東下する時、三成かねて老臣柏原彦右衛門を遣はし、吉隆を途中に要請して、佐和山城に迎へ入れ、始めて大事を告ぐ。此の時まで、吉隆は全く三成の大陰謀の決心を聞知せざりしと見ゆ。此だけを以て推せば、彼の人物稍迂直なるやに思はれざるに非ず。然れども彼は、三成、是ほどの大計畫を思立つに、彼に相談せざる事無き筈と確信したりしと見ゆ。而して三成が、敢て吉隆に相談せざりしは、彼が才を恃んで自ら用ふるの弊なり。

●若し三成をして、厚重の人物ならしめば、必らずや大事を決するの前、吉隆に謀りしなるべし。先づ吉隆に謀らずして、直江山城守に謀れるは、彼が事功に急にして、唯だ其の才に馳すればなり。

三成、佐和山城中に、吉隆を歓迎し、大事を諫す。吉隆、果して諫止するに、家康の人物、容易に勝つ可らざるを以てす。三成曰く、貴意を諫す。然れども事、既に如何とも爲し難し。直江山城をして主人景勝を勧めて旗を揚げしめたるに、武道の本意に於て、今日、景勝を見殺しに爲す可らず。

吉隆曰く、一期の大事を承はりたる上、聞捨にして去り難し。且つかねて契約の一言、泰山の如し。今日に於て、吾が一命、貴君に與ふる外無し。それにも上杉の家來、直江山城に相談するほどの事を今日まで、吾等に秘したるは、満足とは思はず。然れども今更、言ふも詮無し。此の際、貴君に言ふ可き事二あり。三成曰く、如何様の事なりとも、願くは肝膽を傾けて語り聞かされよ。

吉隆再び語を續ぎて曰ふ、貴君、生平、諸大名に對し、殊の外、驕傲にして、評判宜しからず。江戸の内府は、日本第一の大諸侯なれども、如何なる輕身、小名等に對しても、感愨にして愛嬌あり。これを以て、一世の人望を負ふ。且つ貴君と吾等との如きは、太閤の拔擢を得て、卑鄙よりして躍進して、堂々たる諸侯となるを以て、諸人、唯だ面に敬して、心には服せず。吉隆又曰く、此度の大事、貴君、必らず輝元、秀家を推戴し、自ら下つて其の指揮を得ん事を勤めよ。更に一大事あり、然れども此の事、極めて言ひ難し。如何に親友の間と雖も憚らざるを得ず。三成曰く、それほどの事を言聞かされてこそ、知己の親ありとこそ思へ。

吉隆曰く、武家の第一は智勇に在るは論莫し。貴君の智慮才覺、無雙といふ可きも、勇氣は稍劣る歟。此度の一大事、假令、輝元秀家の名を以てすと雖、眞の魁首は貴君たる事論莫し。則ち眞先に身命を抛つ可きは貴君なり。家康、東歸の途中、石部に宿したる夜、貴君、一萬の兵を擁して佐和城に在り。水口の長束等と謀り、家康を燒討し、掩撃する事を爲さざりしは何ぞや。謀、此に出でずして、家康を東歸せしむるは、譬へば虎を千里の野に放つが如く、實に大なる油斷といふの外無し。是、一に、貴君勇氣少く、つねに安全の勝利をのみ希ふの致すと

ころに外ならずと。三成、大に赤面しつ、知言を感謝せしと傳ふ。

抑、吉隆、三成に説くの一條、三成論の翹楚たらずんばあらず。此の事、吉隆の親族早水咄齋より傳ふといふ。

其 六

若し、三成、正家等、兵力を集注して、家康を石部に掩撃したりとせば、三河武士の勇を以てすと雖、家康の安危、未だ容易に知る可らざりしなり。吉隆の説の如く、此に於て、家康を攻めずして、彼をして東歸せしむ。千載の好機、長へに逸し去る。家康、石部の一夜は、第二

の本能寺なりしなり。

●一たび本能寺の事ありしより、家康また其の覆轍を履む者に非ず。然れども、如何に、家康の勇を以てすと雖、若し、石部に掩撃せられなば、萬全を保する能はざりし。

●家康、石部に宿する夜、切に戒嚴を加ふ。假令、戒嚴すと雖、三成は大軍なり。此の一夜に勝たずんば、三成、到底、家康を獲るの機無し、思ひ一たび此に到らば三成、則ち虎穴に入つて虎子を獲るの覺悟無くんばある可らず。若し、三成に此の覺悟ありしとせば、家康、戒嚴すと雖、危ふかりし。

●家康を倒さずんば、三成の壯圖成らず。三成、壯圖成らずとも、既に、家康を斃すを得ば、更に、家康以上の勁敵ある事無し。三成の安危。成敗如何。唯だ石部の一撃にありしのみ。

●張子房は智者を以て聞ゆ。然れども彼が博浪の一撃に、秦皇の膽を奪ひしを見れば、彼は勇者たらずんばあらず。

●李太白、張良を詠するの詩に曰く、滄海得壯士、椎秦博浪沙。壯舉雖不成、天地爲震動。潜惡游下邳、豈曰非智勇と。蓋し子房の意を得たるものなるべし。

●張子房、博浪一撃、天地を震動し、其の遁竄するや、蛟龍の九淵に潜めるが如く、秦皇の威を以てして之を獲る事能はず。後ち、子房、更に劉季を用ひて、遂に秦の天下を奪ふ。

●三成、石部の一撃を試むるの勇無く、潜惡して仙人に隨游するの智無し、而して輝元、秀家を用ふることも能はず。彼の智勇は、張子房に及ばず。張子房は、必らずや三成の如くに、驕傲を負ふの人にては無かりき。

●家康、石部の一宿は、家康一生の危機にして、實に、天、家康を以て三成に授くるなり。天の授くるものを取らずんば却つて禍有り。然れども天の與ふるものを取るは、管に、智慮のみならず、勇氣を要す。天與の物、大なるほど、之を取るに大なる勇氣無くんばある可らず。秀吉、家康には此の大勇あり。

●吾輩、憶ふに、張子房は、自ら天下を取るに足る丈の智慮分別を有したり。彼は、一世の雄なり。然れども天下を取るの徳無きを知つて、自ら天下を取らんとは爲さざりし。三成も亦た子房の如くす可かりしに、彼や自ら天下を取らんとしたるが、其の了簡達なりし。

其七

●家康の、關ヶ原に赴くや、壯心勃勃、勇氣其の身心に餘りて溢る、の概無くんばあらざりし。新著聞集に、家康、進軍の途中、旅僧に逢ひ、召して勝敗を卜せしめし話の如きは、彼が這般の心地を表現するものといふべし。此の旅僧則ち源譽にして、後に増上寺住職の親智國師とな

りしといふは誤なり。然れども此の旅僧が觀智國師に非ずといふを以て、此の話の興味を抹殺す可きに非ず。

●家康、三成の擧兵を聞き、雀躍して西向す。秀吉が山崎に馳すると家康が關ヶ原に赴くと、志は則ち同じ。敵は眼中に無し。萬々、勝つ可きの敵なり。一たび勝てば天下は吾が掌中に收まるべし。此の時彼は眞に、人知れず、雀躍したるならんばあらず。

●傳説に曰く、家康、旅僧に問ふ。旅僧答ふ、果然、負軍なるべし。其の故、如何とすれば、大敵を、唯だ一時に挫く可しとの氣勢、而貌の上に躍如たり。かくては必らず勝利有る可らずと申す。家康問ふ、果して然らば、如何せば則ち可なる乎。

●旅僧、再び答ふ、願くは天下を泰平にし、萬民を塗炭に救ひ、寺社の廢頽をも興隆せしめん事を期し、大悲の兜を戴き、忍辱の鎧を穿ち、唯だ天地神明の爲に敵軍討伐の志を堅めさせなば、勝利、疑有る可らずと申す。家康、其言を嘉稱す。斯の僧を戰場に伴ひ、敵味方の戦死者を追善回向せしめしと云ふ。

●家康、旅僧に語るの傳説は、其の間、或は、誤傳を交ふるものあるやも知れず。然れども旅僧の言は皆可し。關ヶ原に於ける家康、出陣の美談とするに値するものは、此の傳説なり。而して家康の面貌、大敵を一氣に挫かんとの勢、現はれしといふは、恐らくは眞事實ならんばあらず。

其 八

●蓋し、家康、江戸を發し、雀躍して關ヶ原に赴くや、彼の態度たる、實に、彼が生前、未だ嘗て示さざりし欣喜、勇進の勢を示せり。彼も又た其の充實せる大なる一生涯の中にも、此の時ほどの、中心の愉快を感じたることは、有らざる可ければなり。

●人生の快心事は、優曇華の花、開くを待ち得たる時に在り。關ヶ原一戦は、家康に於ては、優曇華の花たるを失はず。

●家康の性質、特地に辛抱強く、驚く可きほどの堅忍持久の力を發揮したるも、期するところは唯だ關ヶ原の一戦に在りし。是を以て、彼は、勇躍して、關ヶ原に赴く時、眞に手の舞ひ、足の踏むを忘れしもの無くんばあらず。

●景勝が旗を會津に揚ぐるに及び、家康、京都を發して、東征するに當り、心中、固より三成が其の背を衝きて起るを期す。然れども家康、京都に在る間は、戦端發せず。彼は、戦機を誘發す可く、自ら進んで東征したり。故に、彼が景勝の擧兵を聞きし時漸く佳境に入るの思を爲せり。

●景勝、起ち、續いて三成起つに及んで、花、爛漫として開く。まさに觀花の佳境に入る。彼が三成舉兵の報を得たる時、「花咲かば告げんといひし山里の使は來たり、馬に鞍置け」の感無くんばあらざりし。彼の喜、想像するに餘あり。

●家康、江戸を發して、關ヶ原に赴くや、雄心動きて已まざること、恰も消防車の馬が、警鐘の亂打を聴くが如く、渡鳥の季節、渡鳥の胸の騒ぎて鎮らざるが如く、清姫が安珍を追ふが如く、或は狂熱したる情婦が穴隙を切りて情夫に走るが如くなりしなるべし。

其 九

●關ヶ原に赴く家康の心、勇める駒を花下に繋けるが如し。勇める姿、如何にも美しく。然れども駒が勇めば花が散る、家康の心の駒が、花の散らざるほどに勇みしは、彼が節制と勇氣と兼ね備へたるを見よ。

●家康、上方の變を聞き、會津攻より江戸に歸り來り、九月朔日を卜して、西征の途に上らんとす。石川日向守家成、朔日は西方塞の日といふを以て諫止す。家康曰く、果して然る乎。若し西方塞がらば吾往いて之を開かん。

●家康、江戸を發途の日、外櫻田の門に到りし日、偶、岐阜より福島正則の軍が三成の勢を斬

りし首、品川に著せるを報じ來る。命じて之を増上寺の門前に陳列せしめ、發途の吉祥なりとして大に喜べり。

●家康、軍容、甚だ清肅、毫も氣勢を張ること無し。旗を絞り、旗印、馬印も人目を引かず、馬印をも、奉行をして、先づ奉じて熱田に到らしむ。故に、彼が東海道を上り來る時、風聞、敵軍を驚かさず。而して大垣に著し、敵軍と咫尺の間に接するに及び、始めて旗幟を盛んにし軍容一變、精彩、頓に空を蔽ひ、敵軍を驚惶せしむといふ。

其 十

●家康と三成とは、段違ひの碁客が對戦するが如く、高段者の心中、著々、餘裕を存す。旗幟を増減する如き、殺活、一に、手中に在るに由る。

●敵、全く吾が術中に落ちるに及び、高段者は始めて其の鋒鈍を露はし來るものなり。然れども事、此に到る時は、敵軍、既に膽落ち、智窮す、施す可き手段有ること無し。敵を獲ること、囊中の物を探るが如くならずんばあらざるべし。

●蓋し、三成と家康と碁戦するに譬へば、三成は、互先の對手には非ず、數目を置く者は、宜しく先づ其の隅を固くして、地盤を守り、然る後、邊を見て進展を畫すべし。策戰の短氣なる

者は必らず勝たず。局に臨む時、氣を長くして持重するが必勝の捷徑なるべし。
 ●三成の策戦は、家康の高手たるを忘れたるが如し。先づ自ら固くするを爲さずして、中原に一大決戦を試みんとす。中原の一大決戦は、高手者が弱敵と對局する時、つねに理想とするところなり。三成進んで、之を試みんとするは、家康の思ふ壺に嵌まれるなり。
 ●若し戰鬪術を以て言ふも、家康が野戦を得意とするは、知らざる者無し。三成、則ち中原に向つて、此の野戦の老手と、一大野戦を試みんとす。盲者、大蛇を恐れざる者に非ずして何ぞ、而して家康は、此の「盲蛇」に向つて、竊に快心の微笑を禁ずる能はざりしならずんばあらず。

其十一

●家康、赤阪に到る。彼の宿陣は、二階にして、極めて粗略の結階を以て昇降すべし。諸將の斥候交々來り、階下より、敵軍、十四五萬、雲霞の如しなどと報す。田中吉政の斥候は十五萬と報す。
 ●家康、黒田長政を麾ねく。長政の部下、老練の士ありといひ、毛谷主水に偵察を命ず。主水馬を驅つて歸り來り、階下より、大聲、家康に報す。勝戦疑無し、上方勢、約一萬八千もあるべしといふ。

●主水の偵察前者の報告と懸隔の差あり。先きの偵騎、階下に在り。何故に、かくは狼狽したる事を言ふぞと。特に、家康に聞かしむやうにいふ、主水答ふ。上方の商人、算盤を以て、金銀米錢を勘定すると偵察とは同じからず。上方勢、山上に陣する者、如何ぞ山を下り來らん。平地に下りて戦ふ者、恐らくは一萬七八千を超ゆ可らず、勝利疑ひ無き所以といふ。家康、聽いて大に喜ぶ。主水を稱するに武功者なりといひ、席上、手づから饅頭を取つて、主水に與ふ。
 ●家康、岐阜に著陣する時、龜甲山立政寺の住持、大なる柿を獻す。家康、喜んで食ひ、又取りて近臣に蒔きて與ふ。「早や、大柿が手に入つたるは」と言つて笑ふ。蓋し、家康、談話を以て軍氣を勵ますなり。然れども家康の談話は、何となく道學臭し。

●九月十五日、關ヶ原、大戰始まるの朝、早朝、家康、女房二人、侍者二人を召し、具足を持ち來らしむ。小姓二人、座に在り。朝食を執る可く、宿所に急ぎ行く。次室に宗圓伺候す、茶坊主なり。家康、宗圓來て手傳へといふ。

●此の朝、家康の装束は、常の小袖の上に、鎧の胴ばかりを著け、黒き廣袖の羽織に、との口の塗笠を穿ち、必ずしも戰場に行く如くならず。唯だ飄々として出て來る。

●蓋し獅子、兎を搏つ、全力を用ふといふと雖、必ずしも重装せず、英雄、大戰場に出現し來る。颯爽たるものは意氣なり。其の風貌は從容として平日の如く、唯だ眼光の輝くを見るある。

のみ

家康、飄々として出で行く。小姓等、彼の意を知らず。何處へ？と問ふ。家康答ふ。敵の方へかくして彼は颯爽として出陣す。旗も、槍も、鐵砲も、悉く後より馳せて追隨し、垂井に至る頃、軍容漸く備はる。

當年秀吉、賤ヶ岳に馳せし時も、亦た輕裝、此の如くなりし。今や、家康は、秀吉が輕裝して得たる天下をば、己も亦た輕裝して、取らんとしつゝ、あるなり。

其十二

家康、實戰に臨まざる事久し。彼が若かりし時は、馬上、戰場に驅馳し、暗啞、叱咤して號令するに、覺えず、知らず、右拳を以て、馬鞍を叩き、指の節皮破れ、血流れて、年を経て竹節の如く固かりしと傳ふ。

關ヶ原に於る彼は、久瀾にして大戰に臨み、當年の勇氣、勃發して、其の勢休火山の爆發するが如くならずんばあらざりし。

其の一生涯に、尤も緊張したりし家康を見よ。關ヶ原！此の日、此の時、家康の心、感激したるヤマアラシの全身の針毛の叢立したるが如くなりし。觸る、もの、悉く、其の針に刺さ

れずんばあらざりし。

如何に沈著なる大人物、家康の如きと雖、此の大舞臺に立つの利那、緊張の極、感激、興奮せずんばあらず。從容、白若、敢て聲色を動かすこと無くして、天下を取りしといふは、其の形容詞たるに過ぎず。

關ヶ原、大戰の朝、細雨濛々、山間の大野なれば、霧深くして、殆んど咫尺を辨せず。十四五間を隔て、見えず。雨止み、霧消え、五十間、百間を遠見すと思ふ間に、霧生じて、敵軍の旌旗、見えつ、或は見えす。

此の大戰場の序幕は頗る趣あり。煙霧、斷續し、生滅し、山上の旌旗も、劍戟も、霧の中より、詩句の如くに閃めきしなるべし。而して霧を隔て、鐵砲の音、聞ゆ。

家康の本陣と、石田、小西、大谷の陣場とは距る一里許、霧の中より鐵砲の音、聞ゆること夥し。麾下、勇んで馬を乗り廻し、家康を環つて人馬馳驅し、陣容、未だ整頓せざる時、野々村四郎右衛門といふ者、馬を馳せて、計らず家康の馬首に乗掛く。家康怒つて、隙さず、刀を抜いて切り拂ふ。

野々村、劍光に驚きて逸し、家康の刀、野々村に當らず。家康餘怒の勢を漏らす乎。更に、刀を揮つて、門名長三郎といへる小性の指物に向つて、指物筒の際より斬る。刀、身に當らず。

●家康、眞に此の小姓を斬るの意ありしに非ず。唯だ威迫の爲なりしと傳ふ。其の後、野々村も、長三郎も共に何等、咎無かりし。

其十三

●大敵を怯れず、小敵を侮らずといふは、英雄の襟度なり。小敵に逢へば臆病者かと思ひて、大敵に逢へば、勇氣、限り知らずと見ゆ。秀吉と家康と、大敵に臨む時つねに此の如し。

●孟子は曰ふ、大人を説くには之を藐かにすといふもの、即ち大敵を恐れざるの意を示す。舌戰に於て此の如し。干戈の間に於ても、亦た固より此の如くならずんばあらず。

●千軍を掃ふものは、ひとり劍のみに非ず。筆力また然り。筆、千軍を掃ふといふは、其の意氣なり。劍も筆も、究竟、其の意氣に存せずんばあらず。

●昔、英國の名將に、切開手術の出血を見て氣絶せし者あり。此の如くにして名將たるといふは訝かしきやと思はる。然れども事實に於ては、出血を見て氣絶せる底の人物に、眞の大勇士なる者なり。荒木又右衛門、堀部安兵衛の如き大勇士は、其の平生に於ては、極めて用心深き人物なりし。

●平生に於て、臆病者といはる、人物は、實戰に於て、死物狂を爲す故に、却つて恐る可し。

今の公山縣が、其の天賦に於ては、臆病と見ゆるほどの用心者なるが故に、武人として大成功したると同じく、家康の大勇は、極めて用心深き大勇なりし。

●試みに文章を以て論ず。大題の大文章は、却つて談笑の中に立案せらる、か、或は作成せらる、か、少くとも從容自若たる間に成るべし。大題小做の法、小題大做の法は文章の秘訣なり。文章に大勇ある者は、小題を侮らず、大題に勇む。若し大題に勇む者に非んば一世の大家たるを得ず。

●秀吉、家康は、其の人、自から曠世の大文章ならすんばあらず。山崎といひ、關ヶ原といひ、ともに一生の大題なり。而して彼等が此の大戦場に赴く態度を見るに、所謂大題小做法の、理想的なるものなり。

其十四

●關ヶ原に於て、尤も吾輩の感興を煽ふるものは薩長の態度なり。長の態度は言ふ可きやう無し。薩の態度は間然するところ無し。島津義弘の勇戦を見よ。

●關ヶ原一戦、一世の智勇を集めて此に戦ふ。然れども其の勇武に於ては、島津義弘の右に出る者を見ず。義弘の勇武は、此の大戦の精彩なり、壯觀なり。或は今稀觀の大勇武たらすんば

あらざる可し。

●義弘は、薩摩人、諡して惟新公といふ、薩摩隼人は天下の強勇なり。而して薩摩隼人の強を象徴する者は、惟新公なり。惟新は薩摩武士の木鐸たるのみならず、日本武士道の権化なり。吾輩は、敢て、彼を推稱して、「武勇の日本」の代表者なりとす。惟新公は、實に、日本武士の木鐸ならずんばあらず。

●關ヶ原の一戰、義弘が現はしたる武威の壯烈なるは、豈、ひとり日本のみと言はんや。恐らくは世界の歴史に、其の比倫を發見する事難かるべし。レオニダスの勇戰と雖、義弘に比すれば、尙ほ數歩を讓るべし。

●レオニダスの古戰場に、獅子像を建てたりしとせば、義弘勇戰の跡を表彰するに、果して何物を以てす可きや。吾輩は、須らく關ヶ原に、義弘の勇武を記念す可く、未だ適當の象徴無きを思ふ。摩利支天、阿修羅王といふとも、尙ほ意に滿たず。蓋し、颯爽たる義弘の像を建るを最善となすべし。

●薩摩人、維新前、鎌倉の頼朝の墓前に、石標を立て、其の家系を誇榮したる事あり。何すれぞ、關ヶ原に、義弘像を建て、以て、薩摩隼人の勇歩無雙たる所以を、天下に誇榮せざるや。●今に於て、薩摩の先輩、識者、海南の武士道鼓吹に盡力する者少からず。薩摩の武士道の權

威は義弘なり。薩摩を鼓吹する者は、先づ義弘を見よ。

●吾輩は敢て薩摩人の武勇を誇稱せり。然れども必ずしも薩摩人のみと言はず。薩摩人の勇武は則ち日本武士の勇武なり。義弘の雄武は日本武士の誇たらすんばあらず。

●講談に、歴史小説に、關ヶ原の義弘を鼓吹せよ。吾輩、關ヶ原の義弘を語る事を喜ぶ。然れども義弘の雄姿を冥想すれば、歎歎、流涕して禁ず可からざらしむるものあり。蓋し、雄武、古今に冠絶する者に非ずんば、吾輩をして、能く此に至るを得しむること無きなり。

其十五

●關ヶ原の合戰に、毛利は推戴されて盟主となれり。鳥津の加盟したるは、大阪城中に妻子を質としたるが爲めなりと傳ふ。鳥津は、西軍の幹部に非ず。義弘、加盟と決したるが故に、武士の本領を發揮したるのみ。

●關ヶ原に於ける義弘の奮戰は、關東武士に對して薩摩隼人の強勇を發揮するに在りし。彼は一意専心武士道の意氣を表現したるなりし。此の外に、義弘には、何等の野心なかりしなり。

●義弘は、無二無三、唯だ武士道の本領を發揮するに在りしを以て、其の強剛、眞に、武士道一圖の強味なりし。

西軍の參謀本部に義弘を加へざりしは惜むべし。凡そ是等の事、三成、智有りと雖、武略に暗きの致すところなり。餅屋は餅屋なれば、戦場の斬引は、須らく是等の老將に委任す可かりしなり。

關ヶ原大戦の前夜、義弘、豊久を遣はし、三成に説くに夜襲策を以てし、義弘、先陣を承はらんと言はしむ。三成、兵を知らず。明日野戦の必勝を期し、之を以て義弘を慰諭せしむ。且つ其の説の中にいふ。古より大軍を以て小勢に向つて夜襲するの例無しと。

夫れ兵は危道なり。危道を厭はば、戦はざるに若かず。戦は故實に非ず。前例を墨守す可き理由、毫も有ること無し。唯だ此の一場の論辯も、三成が家康に勝つ能はざるを徴するに餘有り。

西軍の幹部に在りて、戦策を建る者は、三成、秀家等の名を以てすと雖、實は、島左近、明石掃部二人の謀議に出る事多し。就中、島左近は其の主謀なる者なり。故に、關ヶ原の策戦は、三成、左近君臣を中心とすべし。

島左近は、老功の名士たるを失はず。然れども彼は壯年、武田信玄に屬し、家康の敗軍を見て、家康を侮どれる者なり。彼は、嘗て、秀吉が信玄に破られたるを見し事無かりし、故に、必ずしも秀吉を尊敬せざる事無かりしも、屢、家康の大敗を目撃し、随つて家康を恐るる念無し。

し。

左近、豊久に向つて豪語して「久し振りに徳川公の甲背を見る事を得ん」といふ。豊久、心に、其の高言を憤ると雖、問ふ、何の地に、徳川公の甲背を見得たる乎。左近答ふ、壯年時、武田氏に屬し、遠州掛川に、家康を窮追したる時と。

今の太刀山と雖、彼の入幕前には、其の顛倒を見たる者少からず。大器、既に晩成するの後、誰か能く土俵の真中に、彼を顛倒せしめ得る者ぞ。淺い哉左近が家康を見る事や。

三成が、家康と、堂々たる一大野戦を希望せし事此の如く、其の黒幕に、一言蛇、島左近を有したればなり。嘗に、三成が危道を避け、萬全の勝利を企圖せしばかりにても非ず。

左近に誤られしとせば、畢竟、三成の不明なるなり。左近ほどの人物は、十分、用ふるに足る可かりしなり。

其十六

井伊、本多は家康部下の驍將、強勇の雙璧、土俵の上に譬ふれば、大錦、栃木山といふが如し。蓋し三河武士の精銳なり。家康、關ヶ原に、井伊、本多を麾いで島津に當らしむるは、島津が西國第一の強將なるを以て、先づ、其の鋭鋒を挫いて、敵の軍氣を奪はんとするなる可し。

●鳥津の軍容は此に縷説せず。手兵、僅に一千人。精兵中の精兵なりしを疑はず。然れども餘りに小勢なり。而して井伊、本多が勝つ能はざりしを見れば、薩摩隼人の鋒鈍の如何に剛銳なりしかを知るべし。果然、一千人すべて、是れ精の精なる者なり。

●義弘の部下、其の錚々たる者が青年なりし一事は特筆するに値せずんばあらず。豊久といひ山田彌九郎といひ、皆、青年なり。就中、彌九郎、名は有業、後ち入道して昌巖と號す、一名譽の武士なり、當時、僅に紅顔の二十歳なりし。

●此の頃、薩摩の紋章は、未だ轡に十文字を用ひず。唯だ白地に黒の十字を描きたるのみなり。

●關ヶ原の決戦は、實に、戰國第一の大戦なり。此の日、午後二時頃、大勢、既に決し、西軍、大敗せんとす。家康、速りに、軍使を發し、先鋒諸將を激勵し、粉骨碎身せよ。……、石田、小西の首を見ん事、須臾の間に在らんとす。軍使、飛び廻ること、蝗よりも繁し。

●西軍諸將、既に敗勢を現はし、陣々に向つて頽れ、やがて總敗軍の形勢を暴露し來る。旌旗、悉く伊吹山に向つて、北走し、東軍、追撃頗る急なり。此の時、何事ぞ。軍使、蒼皇として家康に報ず。鳥津兵庫、ひとり關東勢を切離け、東に向つて兵を進めつゝありと。

●西軍の旌旗、悉く北に靡き走る時、十字章の鳥津の旗のみ、獨り東南に向ひ、家康の中軍を指して進みつゝありといふは、嗚呼、何等の壯觀ぞや。

●勝つたる關東勢、潮の如くに湧く中を、十字旗ひとり東進するの光景を冥想せよ。百世の下、其の雄風、人を泣かしめずんばあらざるべし。

其十六

●義弘、初より一千の西軍、而して飽くまで勇戦して、阿修羅王の荒れたるやうに、東軍を突破し、關ヶ原を脱還するに、特に、迂路を執り、南廻して伊勢路を擇びたる事、尤も其の大膽不敵なるを見る。

●關ヶ原より京都に退く路三あり、伊吹山を踏え、北近江を経るもの、其の一。佐和山街道に由るもの其の二。而して其の三は、南廻して伊勢路を執るに在り。然れども關ヶ原より南廻して第三路を執るは、これを第一、第二に比すれば、譬へば四角形の三邊を迂回するが如し。

●南廻の伊勢路を執るには、敵中を突破せざる可らず。故に、南廻は、目的、退却に在りと雖、事實に於ては、敵に向つて前進するものにして、義弘の退却は、これを前退法といふ可し。古今の戰場に前退法を斷行したる者は、唯だ義弘一人あるのみ。蓋し、摩利支天と雖、恐らくは前退法を想像せざりしなる可し。

●義弘、伊勢路より伊賀、大和を経て、備前に艱苦を経て、十九日の朝を以て、泉州の堺浦に

達す。一千の兵、存する者、殆んど稀なり、而して義弘、六十餘歳の老軀、豊肥にして、馬斃る、の後、徒歩して經過す。其の悲壯、勇烈、慘澹、言辭の能く盡くすところに非ず。

●鳥津勢、關ヶ原を脱還するに、向ふところ悉く披靡すと雖、衆寡の勢固より懸絶す。如何に、彼等の鐵腕を以てすと雖、數百の殘兵を以て、勢に乗ずるの十萬を斬倒さん事、容易に非ず。午後三時頃、幸然、大雨驟來し、黒雲低迷、天地晦冥、鳥津勢、關ヶ原に乘じて奮闘し、遂に危機を突破せり。

●天地晦冥、晝も夜の如し。閃電、雷響し、劍光、電光に混ず。敗軍の兵、此の暗黒に戰つて途を失はざるは豪傑といふべし。當時、鳥津勢の英姿、果して如何ぞや。

●蓋し戦場の艱苦、言ひ盡されず。吾輩、嘗て、日露戰役に、奉天戰の時、戦場の友人の書を得たり。九晝夜、敵軍を追撃して、一夜も寝ねず、英姿颯爽といふは、客觀的の語なりと。

●奉天戰は、日本人、大勝の時、尙ほ且つ英姿颯爽の内容、此の如し。義弘、關ヶ原より南廻して大阪に向ふ時、英姿颯爽といふと雖、敗軍の際なり。其の艱苦如何ばかりぞや。然れども敗軍に處して、英姿颯爽たるを見れば、義弘は、未だ嘗て敗れざりしなり。

●關ヶ原に於ける義弘ほどの剛雄を想像したる者無し。然れども日本は武勇の國、一人の義弘無くんばある可らず。而して義弘をして、關ヶ原に戰死せしむるは惜む可し。大雨を降して、

義弘の前退を助けたるは、天意、日本の爲に、此の一大武勇劇を保全したるならすんばあらず。

冥十八

●關ヶ原の西軍諸侯、肝膽、地に塗れ遁逃するを得たる者すら少し。浮田秀家は巧みに逃れたるも氣力既に盡く。西軍に未戰の諸將も、風を望んで肝膽を失ひ、戰意有る者無かりし。

●關ヶ原は一戦にして、大勢、細勢、悉く定まり、再戰の患有ること無し。一大累卵を擧げて、岩石に向つて擲つ如くに、粉碎され舉りぬ。唯だ鳥津義弘と立花宗茂との二將のみ、再戰の氣概ありしは、多とすべし。

●宗茂は大諸侯に非ずと雖、武勇逞し。かねて知名の一勇將なり。關ヶ原の諸將、兵を按じて大阪城に歸り來りしは彼一人のみ。

●義弘は、全く兵を失ひ、潛行して歸來すと雖、其の潛行は、濶歩の意氣あり、義弘と宗茂とは、戰國の軍神ともいふ可くや。此の際に及んでも、再戰の志を失はず。

●義弘と宗茂と、大阪に逢ふ。義弘曰く、必らず國に歸り、一戰を期す。願くは吾が領國に來り給へ、共に戰はん。宗茂曰く、宗茂、戰意勃々、然れども宗茂とも言はるる者が、薩摩を頼みて南下したりと思はれん事を恥るを以て往かずといふ。

●夫れ義弘、宗茂の二雄を除きては、西方戦氣、全く消す。偃武の氣象、實は、關ヶ原一戰に定まる、必ずしも元和偃武を待たざるなり。

其十九

●關ヶ原の戦後、毛利は其の六國は削られ、島津は毫も削封せられず。戦はざりし者は奪はれ、飽くまで戦ひし者は削られず。這般の對照、頗る感興無くんばあらず。

●毛利にして、若し毅然として關ヶ原に出戦し、其の大兵を擧げて健闘せしならば、彼は西軍の盟主なり。西軍の軍氣戦闘力の振作、想像するを得可く、東西勢力の均衡も破れ、西軍の必勝、期す可かりしなり。

●西軍の盟主が出戦せざりしは、兎に角、不覺なり。辯護の餘地あること無し。然れども此一戰、毛利の出でざりしは、初より西軍の統一せられざるのみならず、家康が牽制の效果與つて力ありし事を思はざる可らず。

●景勝、會津に起り、三成と東西、家康を挾撃するの策は、必ずしも悪しからず。家康は兵を留めて景勝に備へて東上するを以て、彼の勢力は、其の一部を割かれたり。秀忠、東山道を登り來つて、上田城下に、眞田昌幸、幸村の父子に阻止せらるゝに及び、家康の勢力は再び其の一部を割かれたり。

●關ヶ原に於ける家康の勢力は、秀康、秀忠二人の兵力を除去せるものなり。三成が敵力削奪の計畫は寧ろ豫期以上に實現せられたり。上杉と眞田との強味の賜なり。

●若し此の時、毛利輝元の大軍、關ヶ原に出場すとせば、東軍は「分」にして西軍は全なり。兵は全を以て分を討つに利あるは言を俟たず。然れども輝元出場せざりしが故に、關ヶ原に於ける東西兩勢力は「分」と「分」の戦なり。關ヶ原に於ける三成は、上杉と眞田との努力を、無にして戦へるならずんばあらず。

其二十

●西軍の諸將、戦死したるは少く、多くは遁逃して捕縛せられたるは醜體といふべし。島津義弘は暫らく措く。大谷吉隆の戦死は壯烈、其の心事、眞に武將たるに背かず。浮川秀家の如く、巧みに遁逃して生命を全くしたるは、尙ほ可なり。三成、行長の如く、遁逃だも能くせざりしは何事ぞや。

●關ヶ原戦は野戦なり、而して西軍は退却の途窮り無し、嘗て包圍せられたるにも非ず。而して主謀の諸將、蜘蛛の子のやうに散つて、山中に潜伏し、間も無く捕縛せらる。武略に暗らき

の致すところなり。
 ●三成、行長の度胸、此の如くにして、再戦の志ありと自ら言ふとも、彼が「負け惜み」たるに過ぎず。三成には執著力あれども、勇氣少かりし。
 ●勝敗の興味、關ヶ原の如く詩的なるは有らず。勝者は旭日の如くに輝き、敗者は溝鼠よりも慘憺たり。溝鼠が旭日を睥睨せんとするは、最後の三成なり。
 ●西軍方に再戦の力ありとせば、大阪城の毛利乎。薩摩の島津及び立花宗茂の外に無し。毛利は兵完けれども戦氣無し、島津は戦氣あれども、兵力、傷けり。
 ●小西は切腹といふ事を知らざるには非ざれども、彼は切支丹なり、切支丹信仰に、自殺の法無しといふを以て、彼は關ヶ原の後の山中より、庄屋を呼んで神妙に名乗つて、自ら捕へられたり。關ヶ原のハイカラ武士は、小西行長ならずんばあらず。
 ●切腹は武士道の精華なり。日本の戦國に、切腹する能はずといふ強き武士有る可き筈無し。行長は切腹する能はされども、能く降伏するを得ると信する者なり。彼の頭中には、日本武士無く、切支丹あり、彼をして三百年後に生れて軍人たらしめば、金州丸の溝口少佐たらずんばあらざるべし。

其二十一

●項羽も垓下に破れ、奈翁一世も、セント、ヘレナに流されき。三成が捕獲されたりとて、これを以て、彼を貶するは當らず。三成にも辯明し度き事は少からざる可し。敗者の心事は、つねに諒察に値す。然れども三成の失敗は、其の不運といふよりも、彼が自ら招けるの罪少しとせず。
 ●關ヶ原戦の翌日、東軍、佐和山城に迫る。城中に三成無し。家康、永原に陣し、田中吉政を召し、北近江を搜索して、三成を捕へしむ。此の時、家康既に、三成が全く落人となれりしを知れるなり。果然、廿一日に到り、吉政、三成を捕へ来る。
 ●關ヶ原一戦は、三成等諸人の爲に、敗北に非ずして、滅亡ならんばあらず。敗戦ならば先づ退却といふ事あるべし。再敗、三敗の後、滅亡来るを普通の順序とすべし。敗戦者は、其の根據地に歸る。三成、退却して、佐和山城に入らず、關ヶ原は滅亡戦なりしなり。
 ●明智光秀は、「三日天下」を以て著聞す。彼の没落は、晩秋の斜陽の「桔槔落し」よりも尙ほ急なりき。然れども更に没落の急なるは、三成なり。
 ●光秀は一擧、大敗すと雖、尙ほ暫らく勝龍寺城に入り、夜深く兵散するに及び、潜に城を脱

出して、阪本に急ぐの途中、竹槍に刺さる。

●光秀の最期は、慘の極と言はる。假令「三日天下」たりとも、苟くも一時の覇者たりしが、竹槍に死すること、極めて悲惨ならずや。然れども吾輩は、寧ろ竹槍に死せざりし三成の最期を以て、光秀以上の慘なりとなす者なり。

●蓋し、光秀、暗夜に、土鼠の如く、小栗栖を潜行する時と雖、尙ほ數騎を従ふ。而して彼が潜行の目的は、阪本城に入るに在りし。三成は、則ち一戦、滅亡し、忽ち落人となり、單身、山中に捕縛せらる。假令、竹槍に刺されざりしと雖、吾輩は、寧ろ三成が光秀たる能はざりしを憐ますんばあらず。

●三成、行長ともに捕縛せらる、時、一卒をも隨へず。秀家は僅に一人を隨へしのみ。彼等の末路の、何んぞ太だ蕭索たるや。

其二十二

●關ヶ原の、三成、敗軍の後、伊吹山を越えて奔竄し、二三日も食事を得ず。稻の穂など取つて食ひつつ、腸胃を害し、困弊して、山中の巖窟に潜伏したるを捕へられたり。

●三成、捕へられし時、其の風貌は、一尺二三寸の放し目貫の脇差一本を懸し、柿童子一枚

著たるのみ。脇差の目貫は、金の駒にして、裏目貫は無し。其の上に、襦袢を纏ひ、米五合ばかりを入れたる囊を腰に結び、鎌を差し、病める樵夫の如くにして、横臥しつゝありしといふ。

●彼は、大將の服装を何處に捨て、而して襦袢と、鎌と、米囊とを何處よりか得來れるぞ。彼は、是等のものを、眞の樵夫より奪へる乎。農家より盗み來れる乎。購ひ來れる乎。

●何人にも落人と見ゆる彼は、先づ其の服装を剥ぎ去られたる乎。彼が身命を全くして、微傷をも負はずして、潜伏しつゝありしは、稍彼の敏捷を見るに足る可きも、彼が大將より樵夫に扮するに至るまでには、一箇の感興多き變装ロオマンズ無くんばある可らず。

●彼の自白に據れば、彼を捕縛の前まで、従者一人を隨へしも、脇差の裏の目貫を以て割符となして、大阪城に入らしめたりといふ。而して彼は、慨然として言ふ、荆棘に潜伏して苟くも身命を全くせん事を期し、垢を含み、辱を忍んで茲に至れるは、唯だ一たび大阪城に入つて、再舉を計るが爲に外ならずと。

●彼は、主從僅に二人、潜行して以て、大阪城に達するの困難なるを思ひ、且つ病軀、潜行に便ならざるを以て、先づ其の従者を大阪に送りて、豫め情況を報じ、且つ救護を求めたるにて

も有る可き乎。

●吾輩は憶ふ。三成、眞に、再舉の志ありしとせば、其は、關ヶ原に於て敗北の刹那に、油然

として彼の胸中に起りしならずばならず。乃ち此の時に於て、彼は一意、佐和山、若くは大阪に向つて、挺身、電奔せずんばある可らず。

●追撃戦の極めて急なりしは、家康の武畧、秀出するを見る可し。西軍の諸將、狼狽して伊吹山に逃げ込みしは、彼等が鈍骨なるのみに非ず、追撃の急なりしが爲に度を失ひたるなり。

●然れども、如何に、追撃の急なるにもせよ、關ヶ原に於ける三成が、佐和山に向つて遁路を失ふ可き筈無し。遁路を失ひて網に入る魚の如くに、伊吹山に駆け込みしは、彼が膽勇を缺き、周章、動顛したるに由らずんばあらず。

●家康と雖、流石に、三成が戰場より直ちに伊吹山に逃げ込みしとは想像せず。翌日を以て、佐和山城を攻め、三成の在らざるを知るに及んで、始めて彼が既に一個の落人となりて、北近江に踞踏しつゝ、ある可きを確め、却つて、其の没落の急なるに驚きたるべし。

其二十三

●捕獲後の三成の態度は、彼の人物を見るに足らずんばあらず。彼が捕へられて、大津の本陣に到りし時、家康、諸將をして彼を見しむ。黒田長政問ふ、三成それにも存命したと思ふや。三成答ふ、甲斐守、愚なる事を言ふものかな。假令、吾が兩腕を斷たる、とも、命だにあ

らば、家康及び、細川忠興の首を獲可くと思ふものを。三成、蟹の如く、口より泡を吹きつゝ、罵る。諸將「減らす口」よと言ひつゝ、笑ふ。

●一息たりとも存する間は、恢復を忘れざるは三成の精神なり。此の事、必ずしも彼の「減らす口」なりとして一笑に附し去る可らず。執著は彼の生命なり。

●家康は、彼に小袖を贈り、彼の飢寒を救ひ、本多上野をして彼を保留せしめ、醫療を加へしむ。三成、下痢を催し、食事も進まず、日夜、唯だ横臥するのみ。本多中務、三成を見て、恭

しく兩手を地に附して慰問するに、三成、無言にして、唯だ横臥したる儘なりし。

●吾輩想ふ、三成、捕獲の後、病に由つて、靜臥し、ひとり冥想到に耽りつゝ、ありし時、知らず何等の感慨か、彼の頭中に往來したるぞや。斷えず彼の心頭に閃めき來るものは、彼が全盛時の幻影なる可く、而して眼前に故人、敵地あり。彼は、深き反省と懺悔とに誘はれつゝ、時々、

昏睡中には、尙ほ果敢無き榮華の夢の去來せしこともあるべし。

●彼が腹痛を病みて、從者も無く、唯だ一人、伊吹中の巖窟に、潛伏し、昏臥したりし時、寂しく、ひとり、靜かなる山中を、但し戦々兢兢として眺め遣りつゝ、回顧と希望との長き綱に

繫がれつゝ、彼の心、繫留氣球の空に揚がれるが如く、安定と動搖とに弄ばれて、一夢の中に

時を送り、捕手の、眼前に現れ來りし刹那、忽然として、風船球の破る、如くに、彼の夢も破

れしならずんばあらず。
 ●彼が捕獲せられし後よりも、彼が捕獲所、伊吹山中潜伏の一幕が、劇曲的なり。三成の一生に於ても、其の内の生活に於て、自ら充實を感得したりしは、此の間なる可し。
 ●田中吉政、三成を捕獲して、大津に携へ來り、家康の本陣の門外に、疊を敷き、三成を置く。則ち三成を生きながら暴らすなり。福島正則、馬上、三成を罵つて過ぐ。三成、忽ち憤怒の相を現はして曰く、汝を捕獲して、今の吾の如くにするを得ざりしは天命のみ。黒田長政は則ち馬を下り、貴殿、不運にして此に至れり」と言ひ、自ら羽織を脱し、三成に著せて去る。

其二十四

●堺の鴉屋宗菴は、茶湯を好み、才人なり。關ヶ原戦前五日、關ヶ原に來り、三成を其の陣に訪ふ。三成喜んで、暫らく往事を語り、頗る真心を吐く。其の話に依れば、三成が一大事を思立ちたるは、一朝一夕の事に非ず。
 ●三成、宗菴に語つて曰く、三年前、太閤の薨後、一日、彼、宗菴と共に餐を共にしたる事あり。小姓、酒を捧げ來る。三成、飯碗を出す。小姓、酒なりといふ。三成、驚きて杯を出す。此の時、既に、三成、一大陰謀に耽思して、酒食を忘れしなりといふ。

●宗菴肩衝といふは、漢の肩衝の茶入、天下の名器なり。三成、嘗て三百金を投じて之を宗菴より購ふ。當時、三百金といふ、珍貴、想像すべし。而して三成の豪華も想見するに足るべし。
 ●三成、此の肩衝を以て宗菴に遺囑するに、彼が萬一、戦死の後、此の名器を保全せん事を以てし、且つ、託するに、彼の爲に茶湯供養せん事を望み、又た言ふ、吾、若し志を得ば、再び金を與へて買戻さんと。宗菴、旨を領して去る。
 ●關ヶ原の戦後、宗菴、堺を逐電して往くところを知らず、彼は身長僅に五尺許の小法師なり。家康、戦勝後、肩衝を得んと欲す。宗菴の繪像を以て、天下に物色す。遂に、宗菴を筑前福岡に發見す。小菴を營み、幽にして清奇、三成の爲に、朝夕、茶湯回向を、營みつ、ありし。
 ●宗菴の節義、特筆するに値す。天下の宗匠たる者這般の氣概無くんばあらざるべし。而して家康が、必らず此の肩衝を得んとするは、彼ほどの節制、謹慎、節慾の大家なりと雖、尙ほ成功者の虚榮に煽かされざる能はざるを見るに足るべし。
 ●此の話に據れば、戦前に於ける三成には、健氣の覺悟あるを知る。然れども惜哉、彼には、大賭博の氣分足らず。若し彼をして乾坤一擲の大度胸あらしめば、彼が佐和山を出で、關ヶ原に向ふ時、苟くも一物を留めざるの態度あるを要す。豈、ひとり宗菴肩衝のみに止まる可んや。

其二十五

●家康、嘗て、三成を以て「天與の卵」なりと言ひし事あり。天與の卵の一語、彼の大度胸を見る。太閤薨後、京都に於て、三成、黒田、加藤、福島の諸將と鬭争し、諸將の爲に迫られ、深更、女装して家康に投じて、其の保護に依つて、危難を脱せし事あり。

●三成と家康とは「當の敵」なり。「當の敵」の懷に投じて、死中に活を求めんとするは、三成に非れば能はず。而して此の時、三成を殺さるも、家康に非れば能はず。家康は、窮鳥、憤に入り來るとは思はざりし。「天與の卵」、吾が掌中に投ずと思ひし。

●當時、家康の部下、其の主を勸めて、三成を殺し、以て、禍根を断たしめんとす。家康曰く、否、否。三成は「天與の卵」なり。これを卵子の時に喰ふは惜む可し。宜しく、其の鳥となるを待つて喰はんは若かずと。

●卵子の儘にて喰は、一口に過ぎず。鳥となるの後、美味、飽食すべし。關ヶ原の三成は、既に成熟して大鳥となり、滋味、満身に磅礴し、膏光、羽毛に溢れたり。家康、老來、健啖。食指動きて已まず。三成を捕獲するに及んで、定めて其の食慾を満足せしめしなるべし。

●家康、三成を以て、鳥居元忠の二男、久五郎成次に託し、彼が父の仇たるを以て、憤を散ぜ

しめんとす。成次、三成を禮待し、僅に一夜にして三成を還附す。

●成次の言に曰く、父元忠の死は、公事の爲に一命を捧ぐ。三成との間、何等の私憤あるに非ずと。此の一夜、成次の誠意、三成を動かす。流石の三成と雖、感涙を流すに至るといふ。

●三成、行長及び安國寺惠瓊の三人、各、面目を異にす。捕獲後、家康、三人に小袖を贈る。行長は、難有と言つて著る。安國寺は「それ著よう」と言ひつ、著る。三成は、小袖を見て、何人より贈る乎と問ふ。「上様」と答ふ。更に問ふ「上様誰ぞや。答ふ、内府なり。三成慨然として曰く、太閤薨じて猶ほ昨の如し、何ぞ俄に、内府を「上様」といふや。小袖を謝して著けず。諸大名を見て、頻りに雑言をいふ。

●諸大名、捕虜の三成を笑ふ。三成曰く、討死を宜しとするは、羽武者の事のみ。首將は身を免れて捲土重來を期せずんばある可らず。吾、臆病の爲に此に至るに非ずといふ。

●十月朔日、關ヶ原決戦の後、半月。三成、行長、安國寺等、京都に斬らる。三人は殊に關ヶ原の首魁なり。此の日、三人を傳馬に乗せ、一條の辻より室町を經、寺町に出で、六條磧に於て、萬人環視の中に、穢多をして斬首せしむ。家康が、其の政敵に酬ゆる所以のもの、亦た酷ならずとせず。

●七條道場の上人、極刑の罪人に、最期の十念を授るを例とす。此の日、上人來る。三成は、

法華宗なるを以て受けず。行長は切支丹、安國寺は禪宗なるを以て、共に、念佛の用無し。上人、手を空しくして歸る。

三成、斬らるゝの日、途中にて渴して湯水を乞ふ。偶、湯、求め難し。警固者、柿を與ふ。三成、痰の毒なりと言つて辭す。警固者、みな笑ふ。三成曰く、大志を抱く者は、首を刎ねらるゝまでも、命を惜み、何卒、本意を達せんと思ふ者なり。汝等、燕雀、鴻鵠の志を知らざるに同じと。

三成は、鴻鵠を以て自ら居りし者なり。彼にして若し、關ヶ原に志を得ば、眞に、鴻鵠なりしやも知れず。然れども家康より見たる三成は、鴻鵠にては非ず、尤も脂の乗つたる鴨ならすんばあらざりし。

家康、深く西軍の附隨者を究速せず、時人、或は、其の寛仁を稱する者あり。又た本多佐渡、家康に勸めて三成の子、夙に妙心寺に入つて僧となりし者を宥恕せしむ。此の僧、岸和田に隱棲し、壽を以て終ふといふ。

蓋し、附隨者や、雛僧や、稀世の大鴨の片羽、飛毛たるに過ぎず。家康、既に、其の大鴨を得たり。必ずしも其の片羽、飛毛を問ふを要せざるなり。

其二十六

細川忠興、藤堂高虎等の諸將は、太閤に深縁有りて、太閤の薨後に、志を家康に寄せたる人なり。此の人々は、武勇談も有るべし。然れども戰國の諸將の中にも、常識の豊富にして、世才の發達したるを認む。忠興の茶湯に於けるは、殊に、これに依つて處世の妙諦を發揮するものあるを見る。

忠興が家康に接近するに至れるは、不思議の因縁あり。不思議の因縁とは言ふと雖、實は、家康が蛛網の廣く渉れるを徴するに足らすんばあらず。忠興との關係の一事は、家康が群雄網羅の徑路の一斑を見るべし。而して家康の面影、また此に由つて想見せらるべし。

關ヶ原決戰の成功は、一面より見れば、家康が勢力扶植の結果を發表せるものなり。彼が性格の、恩を施し、力を張るの、自から黨首たるに適するを見る。然れども彼の勢力扶植法は、慎密、陰忍、堅實の條件を具し、畢竟、彼の人格の表現なり。

吾輩、家康と忠興の關係に由つて、家康の人物を見ると共に、これに由つて、忠興の才幹及び彼が成功の真相を思ふ。家康と忠興と、慎密、陰忍相對す。鐘と撞木との好對手たらすんばあらず。

●關白秀次、嘗て粟金と號し、金銀を諸大名に貸附せし時、忠興も黄金二百枚を借りし事あり。其の後、文祿の頃、秀次の金奉行より忠興の家老松井佐渡に對し、返金の督促に及び、忠興頗る窮す。

●松井佐渡、主君忠興に説き、彼が豫ねて本多佐渡と相知るを以て、本多に由つて、金を家康に借らん事を勸む。其の言の内に、「内府は頼もしき人」といへるを見れば、家康が恩を施し力を張るは、既に顯著なる事實なり。

●本多、家康に告ぐ。家康、本多をして、松井を導き來らしめ、全く侍臣を遣け、本多をして具足櫃を持ち來らしむ。本多、命を受け、櫃を開き、金を出す。其の蓋に二十一年前、某の日と記す。

●松井、謹んで恩を謝し、不日、領國より金を齎らして返すべき事を言ふ。家康曰く、其は惡しき分別なり。此の事、太閤の耳に入らば、余が爲にも、忠興の爲にも宜しかるまじ。慎んで再び口外すること莫れ。

●他日、忠興、家康を訪ふ。閑談の際、忠興、家康の手前を望む。家康笑つて、忠興を數寄屋に招き、手づから茶を進む。事畢り、忠興、請うて本多佐渡を招き、過日の斡旋を謝し、且つ曰ふ、爾來、屢、内府を訪うて提擲を受く可きも、外間、憚りあり、是より來往を已め、他日、

機を待つて謝恩の志を表すべしと。

●家康と忠興との默契は、此の如くして、家康の茶室の中に成る。戰國群雄の外交に於ける、茶室の妙用の一斑を見るべし。秀吉も家康も、皆、茶湯を利用したり。殊に、忠興は、斯道の大家なれば、這般の脈引に如才ある可らず。

●吾輩は、戰國に於ける「趣味の茶室」を描かば、必らず外交の裏面史を綴るを得可く、表は劍戟にして、裏は茶柄杓なる可く、極めて感興的なる外交史を得るならんと思ふ。

●其の後、忠興は、家康と他人らしくして、其の實、一點眼中の靈光相語る。太閤の薨後、家康、利家と衝突の時、忠興、其の間に調停し、巧みに家康の爲に計りしも、三成等、二人者の私情を忖度する能はざりき。

●三成、捕獲の後、命だにあらば忠興の首を得て甘心せんと言ひし如き、彼が忠興を懐むの深きを見る可く、隨つて、忠興が家康に結びしの、深きを知るべし。

●藤堂高虎の如きは、家康に隨つて、景勝征討に従軍する時、其の妻を軍中に携へたり。彼の妻は、巴御前が旭將軍に隨ひしと、其の意義を異にす。高虎は、其の妻を人質として、家康に誠意を披瀝したるなり。

其二十七

●關ヶ原が、家康の敗戦に歸したれば如何。是れ興味ある問題たらずんばあらず。然れども、好意中立の人物も、多くは家康の勝利を信じたり。唯だ此の如く、半日にして、大勢、家康の掌中に歸す可しとは豫想する能はざりき。

●山崎と關ヶ原との二大戦に、前後、各、一箇の洞ヶ峠ありき。前者は天下後世に著聞し、筒井順慶の一語、兒童にも知らる。後者は則ち巧みに韜晦し了る。前者の智、遠く後者に及ばず。後者は筑前の黒田如水なり。關ヶ原の洞ヶ峠は九州に在りし。

●前後二つの洞ヶ峠は全く其の意味を異にす。唯だ形勢を觀望する丈けは同じ。順慶は、勝者に附屬せんが爲に觀望す。如水は、自ら勝者たらんが爲に觀望す。如水が觀望の目的は、順慶の如くに小ならず。

●但し、順慶と如水とは、其の境遇を異にす。如水は遠く關ヶ原を離れて、九州に居りしを以て、此の如き態度を執るを得たり。然れども彼をして若し中原に在らしめば、其の態度、更に見る可きものありしならん。

●秀吉が山崎に馳せ上る時、秀吉の爲に大賭博の參謀となりしは如水なり。關ヶ原の時には、

彼自ら大賭博を試みんとし、小さく當れば領土を擴け、大きく當れば、天下を狙はんとしたり。關ヶ原の勝負、一呼吸の間に決著したるは、如水の大賭博が外れたるなり。

●關ヶ原戦後、如水の功を詮考するに及び、家康「彼の忠勤は、底意の知れざる忠勤なり」といひ、如水に行賞せず。流石に、英雄は英雄を識る。

●如水、他日、其の子、長政が、關ヶ原に、眞幕に粉骨碎身して、家康に忠勤したるを冷笑して、馬鹿者と言へり。長政は好箇の武將なれども、覇圖無し、如水より見れば、大不肖なりしなるべし。

●吾輩、順慶を「消極的の洞ヶ峠」とし、如水を「積極的の洞ヶ峠」となすべしと思ふ。

●如水は、關ヶ原の後、又た壯圖を試むるの機會無し。千載一遇の好機、長へに去る、優曇華の花、咲きて直ちに落ち、盲龜、浮木を見て、忽ち浮木は波濤に洩はれたり。如水、隱居して、慈善と風流とを事とし、或は行樂して百姓家に休憩し、浮世三分五厘に、餘生を送りたるならんばあらず。

關ヶ原の論、此に言ひ盡さず。戦國に於ける尤も興味多き問題なるべし。此の稿、前半は、成田町、あづき屋の三層樓上に起稿し、後半は、東京に歸りて記す。

大正六年一月十七日

黒頭巾再記

少年の朝鮮都督(上)

其一

●輝く秀吉の歴史の中に、十五歳の少年を抜擢して、朝鮮征伐の總大將に任命したる一事は、彼の生涯に、更に、一層の華麗を加へたるものといふべし。

●此の少年秀才は、果して秀吉の鑒識を空しくせざりき。秀吉の薨去するに當りて、其の年齒尙ほ未だ青年たるに過ぎず。若し、秀吉をして、多少の壽を保つを得しめば、此の少年秀才の器識も亦た、秀吉の提擢の下に、顯著なる發達を遂るを得しならんと思はる。

●然りと雖、假令、天賦の非凡なるものありと認めたるにせよ。此の如き一少年を擧げて、此の如き大任を托して疑はざるに至つては、秀吉の大膽、寬量、蓋し想像するに餘あり。

●秀吉は、新人物を青年の中に簡拔して疑はず。蒲生氏郷、石田三成の如きは世上に著聞す。然れども十五歳の一少年を簡拔したるは、秀吉の生涯の中にも、唯一無二の英斷と爲す。

●近來、廿歳前後主義を唱道する者あり。現代、治平の日本、人材、皆中年以上なる時に當つて、廿歳前後の一語も亦た多少人意を快ならしむるに足る。豈、計らんや。秀吉は既に十五歳

の一少年を擧げて、外征軍總司令官の大任を托するあらんとは。秀吉の眼中には廿歳前後も何もある事無し。若し此の有爲なる少年が十三四歳なりしとも、同じく此の大任を托せしやも知れず。

●日本人、大陸に向つて外征するの壯舉、神功の征韓は遼焉たり、暫らく之を措く。其の規模、計畫の知悉すべきものに至つては、勿論、秀吉の征韓軍を以て始と爲す。此の事、吾が民族の大陸發展史に於ける未曾有の快舉たり。而して其の都督が、僅に十五歳なる花の少年なりしといふは、又た吾が大陸發展史の第一頁を飾るに足る可き快心事ならずんばあらず。

其二

●新人物を提擢せよ。青年を簡拔せよ。日新の機運、此の一事に在り。興國進取の策、唯だ此の一事にあり、日清、日露の二大戦争に見るに、其の總司令官なる者は、皆、白髮の老將軍なり。其の帷幄には半白の頭、充滿せり。これを秀吉の征韓軍の、諸將皆若きに比すれば、全く面目を異にす。

●秀吉の征韓軍に於ける老雄は、唯だ小早川隆景あり。斯人、將帥として、政治家として、一世の人物なり、其の智勇、老練、明達、實に、征韓軍の樞機を爲すものなり。斯人、専ら智將

として知られしが、碧蹄館の一戦、李如松の大軍を粉碎したる一事は、其の勇も亦た一世に秀出するを知らしめたり。斯人、老雄といふとも、日清、日露に於ける山縣、大山、野津諸將に比較すれば尙ほ甚だ若し。斯人ありたればこそ、秀吉は、自ら安んじて、敢て、此の少年を都督に任命したるやも知れず。

●然れども斯の少年都督は、断じて、舊劇の殿様にてはあらざりき。其の舉止、態度、自ら機宜に適し、威重に富み、縦令、世教に簡練するの一事は足らざりしにもせよ、毫も稚氣を帯びず、自ら老練の風ありき。

●ピットが一青年にして大宰相たりしを以て、彼の夙成、聰明を稱讃する者は、併せて此の青年大宰相を推舉、任用したる人を稱讃せんばある可らず。吾輩は、斯の少年都督を謳歌するを惜まざると共に、斯の少年都督を、敢て任命したる秀吉の襟度を、痛快とせざる能はず。

●今日の如き治平の世にありては、中年以上の人物の経験といふ事、意外の權威を有す。青年を簡拔するは危険なるやに見らる。吾輩を以て見れば、今日の青年も亦た昔日の青年と異なること無し。有爲の氣力、才幹あり。唯だ一世の空氣、治平に流れて、青年を簡拔するの勇を缺くのみ。

其 三

●斯の少年都督は、世人の知る如く、毛利秀元なり。彼の生涯は、ロオマンズに富み、日本の英雄譚の主人公として、彩華爛漫たるものは彼なり。従來の文學者、多く彼を忘れたり。實は、彼の始めて都督たる時僅に、十五歳の一少年たる事を忘れたるなり。彼の初半生は、將來に於ける少年文學に於ける一明星たらずんばあらざるべし。

●征韓軍の最初の都督は、毛利輝元。輝元は聲望、固より當時の一大諸侯なり。秀元は其の甥にして養子なり。少年にして秀拔なるを以て、養子に選定されたる者なり。

●秀元が輝元に續ぎて征韓軍の都督となりしは、養父の聲望に倚りしといふ事もあるべし。彼が一小諸侯の子弟なりせば、勿論、斯の榮任を見ることは無かりしなるべし、然れども彼が都督となりしは、門閥の爲に非ずして、都督たるを辱しめざるの器量あればなり。

●秀元の大器量ある事を、尤も能く認識せる者は、前に、小早川隆景あり、後に秀吉あり。中にも、秀吉は、秀元の智勇才幹、能く非常の大事に處するに足る事を目睹し、實験し、且つ深く感銘せり。秀吉の爲に、秀元は「少年の大恩人」にして、秀元の爲に、秀吉は「老年の大知己」たらずんばあらざりし。

●侯西園寺公望が少年にして、北越軍の總督となり、續いて重用さるゝに到りしは、彼が門閥の爲といふに非ず、固より彼には門閥あり、然れども彼が頭角を抜きしは、彼の人物の爲なるを、今日に於ては、世人、能く之を知る。

●侯西園寺が少年時より夙成の秀才なりしとするも、彼が門閥の背景あるに非ずんば、安んぞ能く速に一頭地を放出するを得ん。天は、往々、秀才をして、早く其の光彩を發せしむべく、之に賦與するに、高き門地を以てする事あり。秀元も亦た其の天恵を受けたる一人なり。

●侯西園寺は、夙に岩倉公に識られ、續いて公伊藤の知遇を受けて、其の大成を遂るを得たるは、彼の爲に多幸とすべし。惜哉、秀元は秀吉の晩年に遭遇し、續いて關ヶ原戰を歴て、境遇一變し、其の器識を、一世に認められつゝ、有爲の舞臺を得る能はずして、天壽を以て逝けり。此の夙成秀才の後半生の平靜無事なりしは、彼の爲に、極めて不幸なりし。

其 四

●毛利秀元、實は德田元清の次子、毛利元就の孫にして輝元の從弟に當る。元清は、元就の子、隆元、元春、隆景等の弟なり。秀元の元は、元就、元清の元にして、秀の一字は、元服の時、秀吉、偏諱を賜ひて名づくところなり。

●彼の賢叔、元春、隆景二人の鑒識に據れば、彼の人物、風神、同族兒孫の中に尤も能く元就に似たりといへり。夫れ元就に髣髴たる天賦を有し、而して少年にして秀吉の薰陶を受くる事深し、斯人の器度、面目、想像するに難からざるべし。

●秀吉、頗る秀元を愛重し、これを教導、啓發するに、心力を注ぎ、親切を極めたり。秀吉が自ら教育したる少年は、秀元一人なるべし。凡そ秀吉の提擲を受けたる人物、少からずと雖、幼少時より、父らしく且つ師らしき恩愛と注意とを兼ねて教育されたるものは秀元の外には無し、秀吉は深く斯の少年の前途に望を囑しつゝ、其の發達を樂しみたり。秀元の内的生活の上には、此の蓋世の大英雄の精神、宿りたるを疑はず。

其 五

●秀元の少年時の生涯は、桃太郎の英雄譚に似たるものあり。彼は、實在の桃太郎ならずんばあらざりし。少年にして稀有の英姿を備へ、群雄を率ゐて、外征に従事す。豈、桃太郎に非ずや。

●彼は、且つ、一身の武勇としても、驚く可き武力を有し、關ヶ原戰より歸途、黒田長政の彼を途上に迎へて、強ひて彼を家康の本陣に拉致せんとしたるに、彼は隨はず、從容として長政

の腕を攫みて行くに、長政は、聞えたる勇將なるも、腕、痺れて、却つて彼の爲すに任す外無く、此の少年の大剛なるに、心中、大に驚きたりといふ。

●戦國の諸將、ロオマンチックの人物多し、戦國はロオマンズの世なり。然れどもロオマンズの秀元は、精彩あり、豪華あり、光榮あり、當時のロオマンズの勇士と雖、夢見るやうな眼を以て、秀元の一身を瞻視したるべし。

●少年の秀元は、古今の果報を其の若き春榮の一身に集めたるものなり。彼の身邊には、花、悉く咲き満ちたり。花彩、光りて、彼の英姿を包みたり。秀頼は秀吉の實子にして繼承者たる果報を以て生れしかども、其の現世に受けし大果報は、到底、秀元に及ばざりき。

●秀元は、眞に、古今の大果報者といふべし。秀頼の果報といふは、落日の餘影たるに過ぎざりき。其の彩華の中に、寂莫あり、哀愁あり、其の背景に、麗はしき太陽無かりし。秀元の果報といふは、秀吉を背景としての果報なり。

●秀吉は、自ら空前の大英雄なりと信じたる力量、全盛を示す可く、實子の秀頼を愛するには秀頼は餘りに幼稚なりき。此の時、秀吉の眼前に現はれたるが秀元なり。秀元は血縁を以て愛せられたるに非ず。器識を以て愛せられたり。

●三千圓の雛人形、此の春の東京に賣出されしは、世上の物議を惹起したり。歐洲の大戦争は、

未曾有の大成金、大豪華を出現せしめたる中に、目立ちたるは、此の雛人形なりし。秀吉にも、これほどの豪華無かりしか。

●人情、富豪を致す者は、必らず雛人形を美しく飾る、然れども雛人形を美しくするは、其の兒女を美しくするの情なり。雛人形は實の兒女に若かず。此に於て、大成金の子女は、概ね古美術の天人の如くに飾らるゝを常とす。

●雛人形は物言はず、兒女は語り、笑ふ。然れども頑是無き兒女は、如何に美しく飾りたらんも、嫌らざるところあり。美しき兒女の、頑是無さ、愛らしさを以て、聰明、智勇の力を表現せば、如何に愛らしかる可きや。此に於て、桃太郎は、大英雄、大成金の理想的なり。而して秀吉の爲に「桃太郎」たりしは、秀頼に非ずして、秀元たらずんばあらざりし。

其 六

●秀吉、一生の大難は、文祿元年、七月廿四日、小倉沖、柳浦灘に於ける乗艦沈没の際なるべし。舊劇には、山崎合戦の時、秀吉、光秀の將四方天但馬に窮追せられ、寺に投じ、味噌摺坊主に變装して、僅に、免かる、を得たる事を脚色す。此の事、固より荒唐無稽、事實には非ず。事實の大難は、小倉沖の遭難にあり、此時、挺身、急に赴き、秀吉を萬死の中に救ひたるは、

秀元なり。秀元、此時、十四歳の少年なりし。
 ●秀吉、肥前の名護屋に在り、名護屋は征韓軍の大本營なり。秀元、大本營に伺候すべく、安藝を發して赤間關に到る。安藝は、當時、毛利氏の本國なり、朝鮮軍、京城を占領するの捷報聞するを以て、秀元は、祝意を表せんが爲に、名護屋に赴くなり。

●此時、偶、秀吉の北堂、大政所、京都にて老病、危篤の急報に接し、秀吉、名護屋を發し、急行して、七月廿三日を以て小倉に到るに會す。秀元、乃ち馳せて小倉に抵り、秀吉に謁す。其夜、五更、秀吉まさにお晩餐を執る。秀元をして陪食せしむ。

●其の翌日、秀吉、秀元を慰諭して、先づ歸り、廣島に候たしむ。秀元、乗船の小にして、航程、期し難きを以て辭す、秀吉曰く、予の行、大政所の病を歸省するにあるを以て、海路、大阪に急行す、必ずしも途中に候つを要せず。秀元、其意を領す。然れども赤間關にて迎接せんと云ふ。遽に、舟を鑿して先づ發す。

●秀吉の乗艦、柳浦灘に及ぶ頃、秀元の船、數町の後に隨ひ進む。秀元、甲板に立ち乗艦を注視す。忽ち老臣伊秩安房守を呼び、乗艦、礙るといふ。安房守未だ信ぜず、言未だ訖らず、艦上、人あり、遽に秀元の船に向つて麾ねく。秀吉の乗艦、「死の礁」に乗り上げたるなり。
 ●「死の礁」は、潮の進退に隨ひ隠見す。「死の礁」の坐礁は、此の大英雄、一生の大難たり。秀

元、侍臣をして舵工と力を合せしめ、努力して船を進む。流汗、淋漓、船、速に艦に達す。至れば則ち艦、殆んど覆没す。秀吉の命誠に蒼海の一葉たらずんばあらず。然れども秀吉は天授の偉器なり、容易に死する者に非ず。

●秀吉、此時、年五十歳、裸體にして、礁上に佇立し、手を掲げて舟を召す。巖峙ち潮急にして舟近づくことを得ず。秀元、命じて小艇を下し、巖間に架す。秀吉、之に乗じ、秀元の舟に躍り入る。或は傳ふ、秀吉、礁巖の上に攀ちて立つ。安房守の鞋奴、背を向け、負うて小艇に移らしむ。

●秀吉、恙無く、小艇に移るや、單身にして、裸體なり。秀元、直ちに其の兩刀を脱し、秀吉に投獄す。從者の佩刀も亦た悉く艇中に投ず。秀吉、大に之を感賞す。蓋し異心無きを示すなり。秀元の忠實にして顯敏なるを見るべし。

●秀吉、命の船を内裏濱に繋がしめ、上陸して、從船の來るを待つ。此時、秀吉の侍臣、能く隨ふを得る者、尙ほ僅に數人のみ。秀吉乃ち秀元の老臣、伊秩安房守、桂源右衛門、粟屋越後守を召して側に侍せしむ。三人恐縮して近づかず。秀吉、これを強ひ、三人從ふ。秀吉、喜び、其の拔群の功を賞し、且つ、秀元の器識を嘆稱し、毛利氏の宗嗣たらしめんと約す。三人、感泣す。秀吉、手づから三人に、章服各一を賜ふ。暫らくして從船皆到る。

●秀吉、從士木下半介に命じ、榜人明石與次郎兵衛を速へ、罪狀を訊窮せしめ、之を戮して、其の首を秀元に授く、且つ秀元をして入京せしむ。殊に秀元の舟人を擧げて舵を執らしめ、秀元の舟も亦た悉く從船となし、其の翌日、赤間關を發して、大阪に歸航す。

其 七

●秀吉が「死の礁」の坐礁は、榜人與次郎兵衛の構爲に出づと傳へ、其の委曲、評論に値するものあり。また是、一箇、戯曲の好題目たらずんばあらざるべし。然れども、此の事、今、茲に詳述せざるべし。

●與次郎兵衛は、訊窮に當り、偽證を呈出し、輝元、異心あるを以て、其の領海を避け、海心を航し、誤つて坐礁したりと言ふ。輝元、此時、朝鮮軍都督たり。輝元、秀吉に對し、異心ある可き無し。然れども朝鮮征伐の時、秀吉、悉く、沿道、毛利氏の諸城を借り、其兵入る。當時、世評、或は秀吉に對する毛利氏の不平をいふもの有りしにや。

●與次郎兵衛の訊窮の時、秀元君臣、亦た側に侍す。木下半介、乃ち秀吉に耳語し、且つ其の偽證を獻す。秀吉、高聲に、之を讀ましめて衆に示し、怒つていはく、輝元、隆景の、予に於けるは、眞に羽翼爪牙たり。予、先に九州を平定せし時、以爲らく、九州は頗る大封、山陽八

州に過ぐ。且つ山陽は京畿に近く、害あり、益無し。九州は、天下、若し事有るも枕を高くして眠るを得べし、因つて毛利氏を山陽より九州に轉封せんとす。隆景曰く、山陽は、先人、百戰して得たるどころ、轉封を願はずと。其の眞率、情を矯めざるを見るべく、予が親信して疑はざるも亦た此に存す。今、斯兒、亦、予が危難を救援す。然るに、何事ぞ、榜人、冤枉を以て、輝元に被らしめんとするやと。乃ち與次郎兵衛を戮し、首と偽證とを、秀元をして朝鮮に送らしむ。

●毛利氏、轉封の事、秀吉の口より出づ。此事、頗る興味あり。蓋し、大諸侯を、容易に轉封するは、秀吉の顯著なる政策の一にして、其の常用手段なり。譬へば千年の大木を移植するに似たるものあり。上杉氏は越後より會津に移さる。徳川氏と雖、海道より關東に移さる、を免かる、能はず。

●家康は、移封に依つて、却つて新生面を開くを得たりと雖、其は望外の幸にして、初より移封は、因より其の希望せざるところなり、秀吉より轉封の命を受けて、免かる、を得たるは、ひとり毛利氏あるのみ。

●朝鮮軍に在つては、關東軍、多くは留守し、關西軍、多く征戰に従事す、關東よりして、從軍を願ひしは、ひとり伊達政宗一人のみ、東北の獨眼龍、また一異彩を有す。しかも、彼の不

休の野心を見るべし。

●轉封の大諸侯は、名を新封の經營に藉りて、渡海せず。他年、關ヶ原の戰に、其の大勢は、朝鮮に従軍したるものと、せざるものとの對抗ともいふべし。東軍の中堅は、轉封の大諸侯、西軍のは、轉封せざりし大諸侯なりし。

●毛利氏が轉封を免かれしは、秀吉の言へる如くんば、隆景の力なり、秀元を毛利氏の養嗣子とし、秀秋を隆景の養子とし、以て、毛利氏の社稷を保全したるも亦た隆景なり、然れども隆景が政治の才ありて、秀吉に親信せらるゝに非ずんば、事、此に至るを得ざるべし。

●大諸侯轉封の一事は、一面よりしては、秀吉の威力を見るべし。徳川時代の國替といふは、殆んど小諸侯に限られたり。秀吉が轉封の口實はつねに、恩賞の意味に於てし、増封の形を具す。而して牽然として、一舉手、一投足の間に、這般の大命令を遂行し、輕妙を極む。眞に一指、以て、巨巖を撼かすの力あるなり。

●毛利氏轉封の事、行はれざりしも、此の風評、流布せし時、毛利氏の部下、定めて物情、不穩なるものありしなるべしと思ふ。與次郎兵衛の偽證といふは、蓋し、此事に因縁するものなるべし。而して秀吉が、此の際に於て、秀元君臣の前に於て、毛利氏との情誼を述べて、特に、轉封を辯明するものは、此の故ならずんばあらざるべし。

●秀吉が外交の辭令に富み、際どき刹那に、際どき聲言を爲し、以て効果を收む。與次郎兵衛誅殺に於ける彼の聲言も其の一なり。

●瀬戸内海の航行六日にして、七月三十日、秀吉、大阪に到る、厚く榜人舸子を賞し、秀元に報じ、ひとり其の舟を留めて、乗艦と爲す、此の如きは、唯だ秀吉が操縦の巧なるのみに非ず、また實に、「死の礁」の救援に對する感謝の、眞率なる表現たらずんばあらざるべし。

其 八

●秀吉、京都に歸著する時、大政所は既に薨せり。其の翌八月、秀元、上洛し、秀吉に謁す。

●秀吉、既に、京都の所司代前田立以法印に命じ、柳浦灘の危急及び秀元が救援の功を具狀奏達せしむ。此に至り、秀元、上洛するや、立以法印、迎へて、俱に入朝す。後二日を経て、秀元、正四位上に進み、侍從に任ず。特旨を以て、位次、先任者を超えて、直ちに參議の後に班す。秀吉、特に羽柴姓を授け、甲斐守と稱す。

●秀元は、舊藩、長門の豊浦藩の藩祖なり。其の後裔、世々、甲斐守を稱す。就中、元義侯、別に梅菴、梅門と號す。政治家の素質を具し、兼ねて文事の才に富み、「梅の春」の作者なり、「梅の春」の作者を識らざるも、天下、「梅の春」を知らざるは無し。斯人、特に、甲斐守を以

て著聞す、歴世の中、秀元、始めて甲斐守と稱し、元義、甲斐守の名に一生涯を開くものなり。
 ●武家補任等に據れば、秀元、此時、甲斐守に任ず、然れども甲斐守の稱謂を用ゐるは、これより十四五年の後、慶長十二年頃より後にあるもの、如し。
 ●秀元、此時、年僅に十四、正四位上、侍從に任ずるは、特別の榮任なり。殊に、一躍、先任官を超過するは、破格の優遇にして、秀吉が、此の可憐なる「桃太郎」的少年英雄を顯榮するの第一著歩なり。秀吉の書狀には、羽柴安藝侍從どのへと書す。
 ●「死の礁」救援のロオマンスは、羽柴安藝侍從の一句を以て、一段落を劃す。然れども少年の秀元は、ロオマン스에生長しつゝ、あり「死の礁」の以前、彼が始めて、秀吉に認められし時も亦た好題目のロオマンスあり。

其 九

●遺傳の系統上より見たる秀元の人物性は開明に値するもの無くばあらず。彼の祖父は元就、元就は多子にして、兄弟、皆、特徴を有し、悉く時流を抜く。元就は兒子の養成に於て成功せる者なり。或は「子果報」なりともいふを得べし。彼の孫の中、尤も秀出せるが秀元にして、彼は間歇遺傳に依り祖父の性質能力を繼承せるは、家光が家康に於けるが如くなるべし。

●元就の諸子の中、嫡子隆元は父に先だち歿し、其の名、顯赫たらずと雖、統率の能力を有し其の才分も亦た普遍的に發達せるらしく、即ち父の繼續者として耻かしからず。決して「總領の甚六」にては非ず。尤も著聞するものは、元春、隆景、智勇の美名、一世に布く。斯の二人は、宗家の爲に、車の兩輪、鳥の兩翼、人の兩手の如し。凡そ兄弟友情の篤き、互助の力の至れる、古今、此の二人の如きは匹儔稀なり。

●元春、隆景の弟、元清は、其の才華、著はれずと雖、著實、老練、宗家の爲に、補助の功少からず、凡そ世間の人物、著はれて力ある者あり、隠れて功ある者あり、元清は後者の一適例なるべし。

●元就の諸子、概ね、父の性格の一部分を得て、其を發展せしめて、特長となせるが多し。元春、隆景と雖、それなり。元就の性格を統合的に遺傳せるは秀元ならずんばあらず。

●元就は、才分、性質、その規模大きく、大器の人物なり。彼の世に出るは、時機、少しく早かりし、彼の輪廓は、太く、確然として、圓滿に發達し、趣味も亦た廣し、智慮明らかに、勇氣逞しく、殊に沈勇なり。精力、旺盛にして尤も堅忍持久の力に富み。其の性行は、堅實を主として打算的なり。

●元就と家康とは、戦國の英雄の中にて尤も能く相似たる人物なるべし。家康の遺訓の劈頭に

いへる「人の一生は重荷を負ひて遠に行くが如し」の一句を體現せるものは元就なり。若し彼をして、中年の後、幸に、風雲に際會する無からしめば、彼は名も無き安藝の一小土豪にて終りしやも知れず。

●彼は、中年以後に於て風雲に際會せしも、毫も前途を急ぐの態度無し。悠々然として餘裕あり、七年を要して尼子氏を經略したるを見よ。彼の辛抱強き、氣の長き、堅忍不拔なる、驚く可き持久力、日本の歴史には稀に見る性格たるを失はず、彼も亦た家康と同じく、「鳴かぬなら鳴くまで待てや、杜鵑」の英雄たらずんばあらず。

●彼は老健、晩成の大家らしく思はるれども、實は、家康と同じく、夙成を以て、晩成を兼ねるものにして、其の大機鋒は、少年時に發露す。宮島詣の一事、彼が少年にして大志ありしを示す。

●彼は、少年にして「天下に覇たらんとする者は、能く一方に覇たり」の名言を吐けり。此の寧馨兒、これほどの器識を抱いて、しかも急がず、焦せらず、境遇に順應して、一步々々、基礎を固め、一事、一事、悉く打算的に、譬へば、本因坊が、低段の置かせ碁に向つて、徐ろに石を下すが如し。其の布局、守勢にだも堪へざるやに見ゆれども、漸次、地盤を固めつゝ、對局、酣戰に及び、機運の熟するに及び、忽ち攻勢に轉ずる時、汪洋、渾々として大江の如く、

海潮の如くなるべし。

●彼は鈍重に非ず、其の銳鋒を遲重の中に寓し、其の根氣強く、悠然、泰然たるは、或は巨牛の如し。日本の歴史には、巨牛に似たる大人物、極めて少し。元就と家康となり。

●元就の裔孫、毛利綱廣、江戸の升平時代に、牛に托して韜晦したる者あり、參觀交代の行列の中に牛を牽く。世人呼んで「長門牛」といふ。長門牛は加賀の鼻毛大名と同巧異曲なり。

●今の世、今の長州人には巨牛の如き大人物無し。馬の如く輕俊なるは多し。牛の如く、遲重なるは無し。長門牛に托して韜晦する者も無し。遲重に非れば、重を負ひて遠行するに堪へざるべし。

其 十

●容貌は人物を象徴すとせば、元就の肖像は、彼の人物を見るべし。彼は風貌、逞ましく、殊に、「精練されたる逞ましき」を有し、智的の光は、中に湛へたる勇氣を蘊めり。體格、魁梧にして勇力にも富みしを想像するに足るべし。

●嚴島一戰、彼の智と勇とを表現す。彼が中軍に在つて麾下に號令するに、音吐、洪鐘の如く、諸隊に聞ゆといふを見れば、彼の風貌を髣髴するに足るべし。

●元就の肖像は彼の生涯を象徴す。彼の裔孫にては、寫眞に見たる維新の際の敬親、軀幹短けれど、剛毅の氣象、乃祖に似たるを覺ゆ。元就に近くしては秀元、酷似したりと見ゆ。

●秀元が非常の勢力を有せしは、見掛に依らざりしと言へば、彼は蠻強に非ずして文強なりしを想察するに足らずんばあらず。

●元就は文事に富み、筆冊に巧に、殊に、和歌に妙に、春霞集の著あり。大江氏は元來、文臣を以て朝廷に事ふ、音人、匡房、廣元の諸人、尤も著はる。文事の才、大江氏の血管に流れつつあるべし。且つ系統の誇榮は、代々、自ら志を文事に傾けしめ、家庭教育の權威を爲すものなるべし。

●蓋し王侯將相自ら種あり、種無しといふは自強の言のみ、文臣の家、自ら文臣を生ず。毛利氏の世系、他の所長の説く可きもの無き君主と雖、和歌、筆冊に至つては必らず拙ならず、必ずしも諸侯の閑にして、歌や書のみに没頭するが爲といふに非ず。

●秀元の筆冊を見れば、英氣溢る。彼の人物も此の如くなりし乎。しかも彼の耐忍、寛容、飽くまで辛抱強きに至つては、全く元就の衣鉢を受るものは彼といふを得べし。

●元就は世に出ること早に過ぎ、秀元は少しく晩きに過ぎたり。此の相似たる祖父と孫との大不幸なり、此の二人と相似たる英姿を抱いて、其の出生の、天運に協ひたるは、維新に逢ひし

敬親なり。古今、東西、およそ人物の出生の幸、不幸ある、果報、非果報あること、毛利氏の一世系のみを以て見るも此の如し。英雄を論ずるは容易に非るなり。

其十一

●母系より見たる秀元の研究は頗る餘地あり。彼の母は越智氏、來島右衛門太夫通康の女なり、來島は又た村上氏と稱す。村上氏は村上源氏、北島親房の餘裔なりと傳ふ。來島といふは、三島の一なり。因島、來島、能島を三島と稱す。數百年來、瀬戸内海の海上權を掌握せるものは、此の三島にして、維新前の、日本の海軍史の語る可きものは、此の三島のみなり。

●三島の物語は、尤も感興に富めり。ロオマンズを以て滿たされたり、凡そ陸戦には、日本にて、諸種の兵法あれども、海軍には、ひとり一の三島流あるのみ。三島流の兵法は、海に於ける日本式を發揮せるものなり。

●聞く。大將東郷は三島流の兵法を愛談したる事あり。日本海戦に於ける、敵の先頭を壓したる事、及び水雷艇の夜襲を以て、疊み重ねて敵の疲弊に乗じたる事の二要項は、三島流の精神を祖述したるものなりといふ。

●畢竟、三島は瀬戸内海に於ける海賊の巨擘なり。海軍は海賊より發達す。戦國の語に、海賊

といふは海軍なり。江戸に、海賊方、海賊橋といひしも皆、海軍なり。海賊橋は東京に存す。三島は、備後、伊豫、讃岐、豊後の沖に當り、瀬戸内海と豊後水道との交叉點に居り、内海の要衝に占據し、航行の船舶より悉く關稅を徵收し、其の武力と富力とを兼有して、居然として海上王の威儀を爲す。

海上王は、自ら別乾坤を有す。假令、陸上に征夷大將軍ありとも、毫も其の干渉を受けず。而して彼等は、進んで海外に發展し、大陸の沿岸に於ける和寇船の中堅を爲せるものも亦た彼等なり。

眞十二

此の三島を統率する者、村上氏と稱す。南北朝合一の頃、村上氏、嗣絶ゆ。此時、北島顯家の子師清、信州より五百の郎黨を率ゐて來り、同じく村上源氏なるを以て、繼承の權ありと稱し、終に海上王となれり。

師清は如何なる人物なりしやは詳ならず。然れども卒然として能く三島に歡迎せしを以て見れば、斷じて凡物に非ず。若し、眞に親房の孫にては非ず、詐稱なりとするも、當時の一豪傑たるを失はず。

師清以後、三島の村上氏は、親房の後裔と稱し、志を、皇室に寄す。朝廷、亦た宣旨を賜ひて、村上氏を『海賊大將軍』に任命し給ひ、代々繼承の時、新に宣旨を賜ふこと、征夷大將軍の例に異ならざりしと傳ふ。

『海賊大將軍』の一語、何んぞ甚だ感興的なるや。内外の歴史に於て、これほどロオマンチックの名稱は少かるべし。秀元の母は、則ち海賊大將軍の姫君にてありしなり。

元就が、嚴島の一戦、風雨に、一舉、敵軍を衝くを得たるは、三島の海軍を得たればなり。此の時、元就も、陶晴賢も、敵味方、ともに三島の海軍を招致し、三島の向背は則ち決勝點なりし。三島は大義に依つて元就に應じ、舳艫相衝んで到る。偶、風雨起る。元就、遲疑するこ

と無く、直ちに三島海軍を率ゐて、風濤を犯して嚴島を襲へるなり。

三島の海軍は、爾後、隆景の支配に歸す。秀吉が中國攻の時、志を得る能はざりしは、要因の一、秀吉に海軍無く、毛利氏に三島の海軍ありて、秀吉の側面を牽制するに足るものなりしが故ならずんばあらず。

秀元の母、奈何の人ぞ、海賊大將軍の後宮の生活、定めぬ闇明の興味、津々たるものあらん。吾輩、未だ這般の材料を得ざるを憾む、來島氏は後、久留島と改む、三島の遺跡は、今に於て、造船の中心たり。形勝歴々、觀る可きものありといふ。

●元就の夫人、秀元の母、ともに委曲に語り度し、吾が歴史は、すべて女の材料少し。遺傳及び家庭、結婚、これ等の事情つねに、研究の材料を得易からざるは惜むべし。

少年の朝鮮都督(下)

冥一

●『少年の朝鮮都督』は、天正七年十一月七日を以て、父穂田元清の居城、備中國、猿掛城に生る。幼名は宮松丸。其の奇しく輝ける運命は夙に開け、六歳にして、宗家、毛利輝元の養嗣子となり、十四歳にして、秀吉の大難を『死の礁』に救ひ、十五歳にして朝鮮軍都督となり、廿二歳にして關ヶ原の大戦に遭遇せり。麗はしき少年時代なる哉。
●天正十二年、元春、隆景、國境を巡視し、中山城に至り、宮松丸を見て、其の神采の秀徹なる、先人元就に髣髴たりと爲し、輝元、未だ男子無かりしを以て、勸めて養嗣子と爲さしむ。宮松丸、迎へられて藝州の吉田城に入る。輝元と父子の契約を爲し、散樂を張る。領國の門族、諸士、畢く集來して、祝賀を表す。此時、毛利氏、領域、殆んど十州に跨り全盛の榮華あり。小公子の前途、花悉く開く。

●宮松丸、始めて秀吉に謁して、其の利器を認めらる、は八歳の時なり。此事、亦た一箇の口オマンスあり。好箇の脚色を爲す。脚色の作者は小早川隆景なり。
●隆景、後半生の中、宗家と秀吉との間に處して、幾箇の脚色を案出し、悉く好結果を收めたり。隆景は戯曲的人物に非ずして、つねに戯曲の作者なり。而して彼の脚色に、屢、利用されたるは、寧馨兒、宮松丸なりし。宮松丸の運命は、隆景に依つて開拓し、創作されたること多し。
●輝元の夫人宍戸氏は、宍戸安藝守隆家の女なり。宍戸一家は宗族強盛にして、毛利氏の起るとき、其の力を得ること少からず。輝元の夫人、此家より出るの理由も自ら理解せらるべし。
●夫人の兄元秀の第五子吉内、夫人の甥にして、幼よりして夫人に侍し、夫人も之を鍾愛すること、所生の如くす。夫人は、之を以て竊かに輝元の世嗣たらしめん事を冀ひ、群臣も亦た或は慫慂するものあり。其の父元秀も陰に、其の事、成就せん事を冀ふ。知るべし。輝元の後宮、一箇の御家騒動を醸成しつゝ、ありし事を。
●隆景は這般の事情を聞知し、憂慮に堪へず。彼、以謂らく、宗統は斷乎として移す可らず。然れども之を明言せば、宍戸氏の怨を買はん。今、秀吉と和睦すと雖、其の意、未だ測る可らざるものあるに、宍戸氏、若し不平の色を現はさば毛利氏の軍鋒、挫劔せん。此事、徐ろに計

らざる可らずと。此の如くして、彼は、此の難境に處して、却つて、巧に穴戸氏の歡心を買ひ、宗統を全くするの名脚色を捻出し來る。

其二

●當初、毛利氏、秀吉と講和せし時、能良源五郎、金山孫市の二人を送つて質とす。然れども二人者は族臣に非るを以て、更に四郎元綱をして小早川氏を冒さしめ、上國に往かしむ。元服を秀吉に請ひしに、秀吉、大に之を重んじ、其の幼字及び片諱を賜ひて、藤四郎秀包と稱せしむ。蓋し、一には毛利氏との盟契を固くするの意に出づ。

●隆景は、藤四郎秀包を楔子と爲して、一箇の脚色を起草せり。彼、窃に、輝元に謂て曰く、秀包、豊臣氏に質たるは、秀吉に於て、隆景の質とするなる可く、世論も亦た之に同ぜん。然るときは、公の質として族臣一人を京に送らざれば、恐らくは秀吉の感情を害せん。依つて熟考するに、吉内を質とするに若く無しと、輝元其の説を必然とし、之を許す。

●輝元の夫人、吉内が質となりて上洛せんとするを聞き、憂愁、措く能はず。其事の中止を願ひ、神佛に祈誓す。宮島の廻廊八十間あり、間毎に、金燈籠を掲げ、毎宵、點燈す。隆景、之を聞き、窃に、其の策の中れるを喜ぶ。

●隆景、嘗て、輝元夫人の侍女に語るに、吉内の上洛、近きにある可きを以てし、且つ曰く、近來、秀包の從僕、手簡を送り來れり。それに據れば、上國は實に鬼蜮の巢窟といふべし。然れども吉内の上洛は、宗家の興亡に干す、今に於て奈何ともす可らずと、侍女、色を變じ、直ちに入つて夫人に告ぐ。夫人いよく恐懼し、憂色、面に現はる。隆景、聞いて、益々喜ぶ。●隆景の老練、巧知なる、良、久しくして、輝元に説いて曰く、吉内上洛の事定まると雖、退いて熟思するに、宮松丸、既に、公の養子たる以上は、吉内を止め、宮松丸を質となさば、秀吉も亦た大に喜ぶべしと、輝元これに従ふ。夫人聞いて驚喜し、元秀も亦た大に喜ぶ。●隆景が、人心を擒縦するの自在、感嘆するに値す。此の脚色の爲に、吉内の世嗣説、鮮やかに破れ、宗統、移らず。而して、穴戸氏一族却つて歡喜するあり。宮松丸の世嗣たる事實、之に由つていよく固し。隆景は智者なる哉。

其三

●秀吉、九州征伐の内旨を報ずるを以て、期に先だち、宮松丸、上國に詣り、秀吉に謁す。大阪に到るの日、秀吉大に悦び、謁見の日、大谷吉隆をして、旅館に來り迎へしむ。宮松丸、女關に到る、吉隆自ら之を麾き、進んで秀吉に謁せしむ。其儀、殊に鄭重なり。

●秀吉、宮松丸を、質としてよりも、賓客として待遇するなり。謁見の時、秀吉自ら鬘斗鉈を授け、頻りに斯兒の勞を慰し、更に、則重の雌刀を授け、宮松丸乃ち自ら佩ぶるところの雌刀を脱して下風に置き、進んで賜刀を受け、退て其の辱きを拜す。秀吉、其の幼少にして、坐起、進退の儀容に適するものあるを感賞す、吉隆、復た携へ出て從臣に授け、以て營中の委曲を語る。

●九州征伐の時、尙ほ一箇の話柄あり、秀吉、先づ隆景を召し、毛利氏分國の城を借りて手兵を置かん事を求む。隆景曰く、分國の事は、輝元自ら分別あるべし、隆景必ずしも保證するを得ずと。秀吉、頗る不平の色、顔に見ゆ。

●隆景、暫らくしていふ。開示の旨意、如何にも保證すべし、請ふ之を見よと。乃ち一紙を巾著の中より出して示す、秀吉、これを閱するに、輝元より隆景に贈るの誓文にして、輝元、一生の中、一度、何にても隆景の意見に背くまじき事を記せり。此度の事、假令、輝元、異存ありとも、此の誓文に由り必らず成就せしむべしと隆景言ふ、秀吉感悦すといふ。

●古老物語に、此事を記していふ。當時、毛利氏の事、大小、悉く隆景に決す。秀吉これを知るを以て、先づ隆景に諮る。然りと雖、隆景、容易に承諾せば、輝元の威光薄かるべし。これを以て、かくの如く思慮を施したるものにして、大體に達し、語に分寸ありといへり。

●吾輩を以て見れば、輝元の誓文といふもの、樽俎、萬一の事を慮りて、豫め作るものなるやも知れず、隆景、毛利氏の後見役、總支配人として、つねに内外、殊に、外交の大任に當る。彼の用意周到にして進退の練達なる、必らず敵手を反撥せしむること無く、敵手を満足せしめつ、悉く敵手の裏を搔き、己の行はんと欲するところを悉く行ふ。豫め謀つて、事毎に、心裏、餘裕あるなり。

●秀吉、小田原征伐の時、徳川氏分國の城を借らんとせし時、本多重次、氣焰を吐きし事あり。其の忠剛の氣象、嘉稱するに足れども、固より隆景の圓轉滑脱なると、同日の論に非ず。

●宮松丸、大阪に到るの後、幽谷を出でて喬木に遷る。最早、關西の麒麟兒たるに止まらず、天下の宮松丸となれるなり。

其 四

●天正十四年、宮松丸、八歳の時、後陽成天皇の御即位式に參列するの一事、また彼の爲に、ロオマンズの一として、傳ふべし。秀吉、京師に詣る。宮松丸をして御即位式を拜觀せしめんとし、前田玄以をして奏請せしむ。玄以は京都の所司代なり。人をして鳥羽に至り、宮松丸を迎へ、導いて秀吉の旅館に到る。秀吉、菓物等を賜ひて、懇ろに慰撫し、警衛士をして、宮松

丸君臣を案内して、九重の門内に到らしむ。

●御即位式の日、秀吉、宮松丸を慰撫し、菊亭右大臣を价して長橋局の許に携へしむ。天皇、誰が見なるやを問ひ給ふ、局、具さに奏達す。天皇親しく慰諭して宣はく、卿が祖父元就、正親町天皇の御即位料を獻じ、皇室に勳功あり、今、其孫、朕が即位に遭遇するは、恰も皇道の佳兆吉瑞といふ可しと。因つて近く携へ來らしめ給ふ。宮松丸の大幸榮なり。

●秀吉、宮松丸が、天顔に咫尺するの久しくして、恐屈するあらん事を察し、また菊亭をして携へ來らしめ、侍従に附して、京洛中外の名勝等を縦觀し、大阪に歸らしむ。秀吉が宮松丸を遇するは、子弟を視るの態度あり。斯人、群雄を駕御するの巧なるのみにあらず。小兒を操縦するも亦た至れり、盡せり。

●翌年三月朔日、秀吉、詔命を奉じ、九州征伐に下るの時、宮松丸を隨へて京都を發し、途中より彼を安藝に送還す。此行、既に、毛利氏、分國の城を借る、また何んぞ質子を要せんといふに在り。

●宮松丸、既に送還されると雖、此の行、屢、秀吉を送迎し、これより後、非常の親睦を以て、秀吉に接近しつ、あり、秀吉、斯兒を愛し、斯兒また秀吉を慕ふ。宮松丸、器識の發達は秀吉に負ふところ尤も多し。

●宮松丸が一生、啓發を受けたるは、秀吉と隆景との二人なり、此の二大才に愛重されたる宮松丸には光榮と精彩とあり。

其五

●宮松丸、六歳にして輝元の養子となると雖、未だ嫡嗣とは定まらず。八歳にして質子として始めて秀吉に謁見し、九歳にして、九州征伐の時を以て、安藝に送還され、質子たりしは一年に過ぎず。質子たりしとはいへ、事實に於ては、秀吉の賓客の如く、養子の如くなりし。

●宮松丸十二歳、天正十八年、始めて輝元の嫡嗣と定まる。此年十月、小田原征伐の戦後、秀吉の命を以て、禁中に於て元服の禮を擧げ、右京太夫に任じ、菊桐の徽號の勅許あり、鞍馬を賜ふ。秀吉、片諱を授け、秀元と改む。

●宮松丸、秀元となるの時、僅に、十二歳なり。古人、十二歳の元服、必ずしも珍とするには足らず。然れども秀元は、童年にして夙に稚心を去りし人ならん。十四歳にして、秀吉の大難を救ひ、十五歳にして朝鮮軍都督となり、十六歳にして、秀吉の愛婿となり、十八歳にして、朝鮮の再征に、再び朝鮮軍都督となれり。其の人物と運命と、ともに夙成、早熟せること、古今に匹儔稀なるべし。

●關ヶ原戰後に於ける秀元は、敗者の位地に落ちしと雖、尙ほ其の聲價を維持し、地歩を占めつ、老年に至れり。彼の一生は、譬へば蕾期の短かくして、燦爛として咲き出でたらん美花の、落花の後、綠葉期の甚だ長きにも比すべき乎。

其 六

●文祿二年三月、秀吉は名護屋城に秀元を召し、朝鮮軍の都督を命ず。此時、朝鮮軍、晉州城を攻めて克たず、援軍を求む。秀吉、乃ち急に秀元を召し、三萬の兵を率ゐて渡韓せしむ。

●秀元、僅に十五歳にして、斯の大任を承はるの席上、家康、利家等も在り。秀吉、顧みていふ、朝鮮軍統帥無きを以て互に軋轢すといふを以て、奉行等を派遣すと雖、今、秀元をして統帥たらしむれば、奉行等をして滯韓せしむるの要無し。斯兒、尙ほ成童にして重任を荷ふ、脚等、或は以て不可となさん乎、然れども予能く彼の風神秀逸なるを識る、且つ隆景、軍中に在り、能く輔翼せしめば、豈、統屬せざることあらんと。諸人、皆、以て、秀元の爲に、家門の光榮となす。蓋し、秀吉、秀元に囑望するの厚きこと此の如し。

●秀吉、秀元の才を識るは、「死の礁」の救難に於てす。斯の印象、當事者に非れば得られず。然れども秀吉は、報恩の感情の爲に、人物の鑒識に盲なるものに非ず。彼は、全く、深く秀元に信頼するなり。

●翌年、秀元、十六歳の秋九月、秀吉の命を以て朝鮮より召還せられて、入京す。秀吉、其の弟權大納言秀長の女を養女となし、以て秀元に配す。少年の朝鮮都督は、終に、秀吉の愛婿となれるなり。

●俚諺に『三國一の佳婿』といふ事あり。秀元は古今第一の「三國一の佳婿」ならずんばあらざるべし。秀吉が一生涯に、豪華を極盡したるは、秀元を佳婿たらしめし時なるべし。

●秀吉、其の養女を秀元に嫁するに、行粧頗る美麗を極盡し、人目を眩耀せしめんと欲す。諸侯伯をして通衢の警衛を爲さしめ、藤堂高虎及び羽田長門守をして、輿駕を送り、これを毛利元康、渡邊飛騨守に、衆中に致さしむ。

●當時、儀衛の盛なる、殆んど筆舌に絶し、語る能はず、畫く能はず、花の新夫人の從輿およそ三百、一も金銀鑲玉を以て粧飾せざるは無く、遠近、觀者、堵の如し、蓋し嫁入行粧の美なるは、古今無類なるべしといふ。

●十六歳の花婿、畫けるが如き朝鮮都督なり。而して其の結婚は、此の如き美しき花嫁の行粧を以て飾らる。端午人形と雛人形との婚禮の如くなりしならん。豈、夢幻的光景に非ずや。

其七

●十八歳の秀元、再び朝鮮都督たるを見れば、彼は第一回の都督に、相應の成績を挙げたるを知るに足るべし。慶長二年、正月元日に、秀吉、秀元に豫示するに、再び大任を命ず可きを以てし、三月、再征の軍を起す、再度の朝鮮征伐に、再應、都督たる事、武門の名譽といふべし。

●彼と隆景との關係は特筆す可き事多し。彼、再び朝鮮軍都督の印綬を帯び、四月下旬、伏見を發し、途、備後の三原城に過ぎて、隆景に告別す。隆景、彼を敬重すること君臣の如くす。宗統の繼承者に敬意を表する所以なり。殊に誠むるに、秀吉の鑒識を空しくせざらん事を以てし、送つて素波の海上に到るに、舟中、なほ古今の成敗、軍事の得失を語り、敬愛、懇切に到らざるは莫し。

●彼が隆景と生別は遂に死別となれり。此の六月、隆景、三原城中に薨す。老い朽ちたる齡にても非ず、今日の政治家より見れば未だ、壯齡たるを失はざりし。彼をして尙ほ數年の壽を保つを得しめ、秀吉の薨後、數年を存生せしめば、其の壽や、天下の大勢に關すること少からざりしなるべし。

●抑、隆景の死や、秀元の爲に悲しむ可かりしのみならず、秀吉の大不幸なりし。彼の喪を聞くや、宗族及び領國、火の消えたるが如し。上下、哀慟せざるは無し。秀吉も亦た悼惜して、「我邦の鎮」を失へりと言ふ。

●秀吉の悼辭は、隆景の英靈に告るに足る。秀吉曰く、若し、才略、以て壽を延ばすを得ば、隆景の如きは、數百歳の壽に至るを得べし。死生は才略の以て延縮するを得可らず惜しい哉。秀吉の近臣、秀吉に和して言ふ、實に、隆景の才略、能く中國を蓋ふものといふべし。秀吉嘆息していはく、汝等の眼孔の小なる、憐むべし。隆景の才略、日本を蓋ふも猶ほ且つ餘ありと。

其八

●秀元、隆景に留別し、三原城中に在ること數日、一日、隆景、話次、問うていふ、航海の東装、既に整へりや、否や、秀元、既に整了すと答ふ、暫らくして話次、また問ふこと初の如し。秀元、また答ふるに整了するを以てす。

●秀元、隆景の言、含蓄ある可きを思ふ。退いて侍臣に諮る。伊秩安房守言ふ、初め輝元、朝鮮軍都督となり、渡韓せし時、公を擧げて宗嗣と定めたり。頃ろ輝元、新に男子あり。今、公

も亦た渡韓せんとす、憶ふに令叔の意、系統を小公子に譲らしめんとするに非ずや。秀元、忽ち其の意を領す。

其の翌日、秀元、隆景に謁し、前意を話す。隆景、快然として言ふ、嚮に、予、之を語らんと欲せしも、亦た實に、先づ、卿の真心より發するに非れば、事態、圓滿ならざるを思ふ。今、卿の言、信に吾意を得たり。予、不日、まさに廣島に抵り、輝元に語らんと。

數日の後、隆景、輝元に謁して、其事を語る。輝元聽かず。秀元の懇志稱すべしと雖、生子甫めて三歳、其の器未だ知る可らず。予、必らず世嗣を變へずと言ふ。隆景、再三、勸むれども、輝元、終に可かず。隆景曰く、父子の言、ともに義あり、孝、慈、互に盡せり。間然す可

き無し、然れども今日に於て之を定めずんば、好機再來せず、後日の虞を貽すこと勿れ。隆景、乃ち、仲介して、輝元、秀元父子をして世嗣に關する誓約を爲さしむ。其の大意、秀元、輝元の後を承け、而して秀元則ち小公子を養子として世嗣たらしむべし。小公子若し其の器にあらざる時は、宗族の中、其の器を擇んで世嗣たらしめんといふに在り。秀元、誓書を獻

す、輝元大に悦ぶ。此日、醴を設けて隆景を饗し、三人、歡を極めて罷む。養子を得るの後、實子生れて「御家騒動」の種子を爲すは世の常なり。義理と人情との交錯は則ち此の破綻を催ぼす。隆景の老練なる、豫め輝元、秀元をして後日の契約を爲さしめ、以

て、義理、人情ともに完くするを得しむ。此事、彼が最後の轉旋にして、間も無く、六月、急病を得て薨す。

其九

秀吉の薨去より一年前、隆景先づ薨じ、秀吉の薨去より一年後、前田利家後れて薨す。前後、此の二人の薨去は豊臣氏の運命をして行き詰らしめたるものならずんばあらざるべし。これを以て、豊臣氏の爲に悲む者は、此の二人の死を聯想せざるは無し。

或は傳ふ、明の講和使沈惟敬、秀吉に謁する時、小丸藥を夾袋より取て之を服す。秀吉怪んで之を問ふ。惟敬答ふ、使命を奉じて萬里の遠境に到る、若し中途にして斃れなば、大禮を失ふのみならず、講和も亦た崩れん、これを以て、天子親製、以て賜ふところの養性の奇藥を服して、珍重、自愛するなりと。

秀吉乃ち惟敬の話を聞き、好奇心に驅られたるべし。懇に其藥を求む。惟敬故さらに固辭す、曰く、外邦人、齎らすところ、未だ其の毒無きを保せず、若し強ひて之を求めば、請ふ先づ之を他人に試み、旬日を歴て害無ければ奉獻せん、秀吉之を可とす。

秀吉、侍臣二人をして、惟敬の奇藥を試みしむ。旬日を歴て精氣えずく、神爽なりといふ。

秀吉乃ち請うて、其藥を服す。時に、利家、隆景侍坐す。二人も亦た服す。其の明年、隆景先づ薨じ、次年、秀吉薨じ、更に次年利家薨じ、侍臣二人は既に先づ死す。沈惟敬の奇藥を服せし英雄、凡夫、悉く將基倒しに斃れたる。其の疾、發するに當り、筋骨碎け、支體收る、皆、同症なりといふ。

●如上の説に由つて見れば、秀吉は支那の講和使の爲に毒殺の陥穽に落ちしものにして、利家、隆景の二元老も亦た連坐して遭難せるものなり。果して然らば、彼に於ては奇計の奏效、大功を喜ぶ可きも英雄の末路、哀しむ可らずや。抑も支那人の奸計、憎むに餘あらずや。

●一丸藥能く英雄を數年の後に斃す。鳩毒、實に、短銃よりも恐るべし。當時、醫藥の貴きこと、今人の想像の上に出づ。計る者、計らる者、ともに今人の感想を以て推す可らず。

●惟敬の丸、若し家康の腹中に命中せしならば、關ヶ原の大戦争は起らざりしならん。此の如くんば、日本の英雄、悉く惟敬一人の爲に斃さる、なり。惟敬は、秀吉側に禍して、家康側に禍せざりし乎。

●如上の奇藥説は、野史の記事に出づ。固と是れ齊東野人の臆説ならんのみ、然れども、假令、臆説なりとするも、毒殺と曠日彌久とを以て二大原則としつ、あるかと見ゆる支那人の外交心理は、巧みに此の一説に表現されたりといふべし。

●そもく、隆景、秀吉、利家、相次いで薨去せしこと、白玉樓中に宿約あるに非るやを想はしむ。天帝、何ぞ頻りに英雄を招くの急なるや。此事、恐らくは時人をして揣摩、臆測を逞しくせしむるに足らずんばあらざりしなるべし。

其 十

●輔佐役としての隆景は、傳ふ可きもの多し。彼が輝元を輔佐するは、人の見ざるところにては、嚴に、忌憚無く、説破すと雖、人前にては、却つて輝元の事理明らかなることを屢、言ひ、其の徳を稱揚す。

●或時、隆景、汗を流して營中より退出し、人に向つて曰く、予、先刻より君前に在つて談するに、公の語るところ、逐一、道理を極め、隆景の老智は、此の如く流汗するばかりなりと。

●隆景が士を用ゐるの態度、寛厚、慈仁、殊に彼が修練の極、能く此に至れるものなるべし。彼は、諸士、世事に練達せる者を、外に用ひ、未だ其の身の一分を盡すを得ざる者を、自ら自邊に用ゐるをつねとす。彼は自ら諸士の師を以て任せしなるべし。

●或時、新年に、隆景、近臣をして、髪を結ばしむるに、其者、大酒漢なりしが、年頭の宿醉を發して、櫛を執りながら、主君の頭上に嘔吐を爲す。其時、隆景驚かず。其者、流石に恐懼

し、退いて罪を待つ。

●家老等、其事を聞き、殊に、新年の際、主君の立腹を想像し、其者をして先づ盤居せしむ。新年を過ぐと雖、何等の下令無きを以て、主君に謁して、罪命を請ふ。主君の命、意外に出づ。●隆景、家老に答ふるに、毫も立腹の意を見ず。曰く、彼者、少しく老練せば、外に用ふ可しと思ふに、今の如くんば、尙ほ其の任に堪へず、暫らく吾が身邊に用ふるを可とすべしと。乃ち其の盤居を赦して、出頭せしめ、これを愛すること前に渝らす。●一藩、此事を傳聞し、いよく主君の寛仁を感戴せざるは無し。君主、士心を得るは、一に寛仁に在り。寛仁には耐忍を伴ふ。耐忍と見ゆる事も、隆景の如く雅懐の人物に在つては、或は耐忍にては無きやも知れず。

其十一

●吾輩を以て見れば、隆景の寛仁は、其の天性に出づと雖、乃父元就の啓發に因る事尤も多し。元就は、躬行實踐して以て諸子を教育したり。彼が中年まで、宗家の幸松丸に輔佐たりし時の態度は、則ち隆景が輝元に輔佐役たるの態度ならずんばあらざりしなるべし。●元就、諸子をして箭を折り試みしむるの逸事は、天下後世に著聞す、此事、事實に錯誤あり

とするも。大體に於て、元就、諸子を指導するの意を見るべし。隆景の青年時、元就、其の短氣を誠飭し、君徳を教ふるの名文一篇あり。

●此文は、今、男小早川四郎の家寶となす。其の大意、極力以て短氣を戒め、寛仁、耐忍、辛抱強くある可き事を説き、隆景が近ごろ一人の士を誅討したるを聞き、其の啓沃の至らざるものあるを指示したるものなり。

●元就は、君主の徳、自ら臣下の良師たるを期するにあるものなり。彼は、君徳は一人の士をも失はざるにありとなし、一人の士を誅罰せざる可らざるも、則ち君徳の至らざるものなる事を力説し、自ら青年時以來の難境、逆境に處したる所以を述べ、切に隆景の反省を求めたるものなり。

●戦國の英雄、術策を以て人を馭し、刑罰を以て民を御す、元就の人君たるの精神態度、唯だ仁の一字に在り。彼は仁に流れず、大勇以て仁を維持す。隆景の人物、全く乃父の餘影たるを見るべく、隆景が秀元を教ふる所も亦た見るべし。

最後の二章、長府町横枕の白鷗居に於て稿了す。五月雨の一日、好晴、小庭の綠樹の間より、海峽の天の碧色、美しく映す。

秀吉と家康終

大正七年十月廿五日印刷
大正七年十月廿八日發行

秀吉と家康

正價壹圓五拾錢

著者 横山 達三

發行者 伊東芳次郎

東京市牛込區神樂町一丁目一番地

印刷者 渡邊八太郎

東京市牛込區櫻町七番地

印刷所 日清印刷株式會社

東京市牛込區櫻町七番地



發行所

東京市牛込區
神樂町一ノ一

電話番町五三七、三〇一七
振替東京一七一

東亞堂書房

碧瑠璃園先生著

縮刷 豊臣秀吉

全三冊袖珍形
正價四圓八十錢
送費十六錢

前篇壹圓八十錢 中篇一圓五十錢 後篇一圓五十錢

絶世の大英雄豊臣秀吉は、島國日本の一大産物なり、彼は尾州の一農家に
呱呱の聲をあげ位人臣を極め、更に明韓を征服して世界的英雄となれり、
碧瑠璃園先生其椽大の史筆を揮つて彼が生ひ立ちより太閤に至れる徑路を
叙説す、一々實地を踏査して、英雄の行蹟を明かにせるもの、文章と史實
と花實兼備して大英雄の風采を彷彿するに遺憾なからしむ、宜なる哉縮刷
成りて更に好評幾版を重ねることや

百目木智璉先生著

徳川家康言行録

中判美頁本
正價七圓四十錢
送費四圓

三百年幕府の基礎を築き上げたる大英雄の言行は、一々本書によつて明瞭
となれり、百目木先生の史筆は、此の偉人を傳するに最も適切なるを見る
宜なるかな修養史傳叢書中の白眉として既に數版を重ねることや。

長瀬春風先生著

豊臣秀吉言行録

中判美頁本
正價六圓四十錢
送費四圓

歐のナポレオンと比すべき稀世の大英雄豊臣秀吉は、尾張の微賤より起つ
て雄を四海に示し、遂に鷄林八道を席卷して、大明四百餘州を呑まんとして、
彼が卓抜雄偉の氣象は、帝國青年の最も倣ふべき所ならずや、春風先生の
快筆恰も天馬空を馳るが如し。

コ2468
な

幸田露伴先生著

頼朝

袖珍美本
正價七十錢
送費六錢

秀吉曾て鎌倉に遊び、頼朝の木像を撫して、赤手天下を取りし者たゞ君と我とのみと云へり、英雄の襟度自ら相同じきものある哉、頼朝も亦秀吉に劣らざる日本の大英雄也、本書は幸田博士が炬の如き史眼を以て、此の英雄を捉へ縦横に品隲す、行文の妙と史實の正と、兩々相俟つて讀者を魅せずんば止まざるべし、乞ふ何人も之を一讀して經世齊家の材たらしむべき也。

小杉天外先生著

伊豆の頼朝

前後二冊
貳圓三十錢
送費十六錢

384

11

終

